

は定かに見とめた。が、あとは再び開澗の世界に立戻つた。さり乍ら次いで寄らず、遠巻きにして聲ばかり。一夜まんじりともせで、牛糞を盛に焚きつゞけに焚いて居た事である。

次ぎは、小巴林コバリンより大板上オウバシに至るの途、オランネルク山間の一頭。それと翌年洗昂線街基附近の一頭とは、眞夏の眞晝に迷ひ出た氣まぐれ者、形犬に似て大きく、毛は時季に依つて異るが、略々灰白色で、背筋が黒く、怒り毛がある。眼は碧く光つて、舐めるやうに人を見る。胸張り腰細く、尾は房々と太くて長い。時に人多ければ、足速やに、さりとて左程急ぐでもなく逃れ去る。その態度はどこまでも狡るさうで、右、左と胡乱な眼つきで顧眄し、なんとなく落つかぬ物腰にも見られる。ものゝ書には、足音立てずとあるが、勿論この種の獸類、足音は聞かれまい。

奈曼旗沙里胡憂ナマンチヤリフウの、羊小屋での印象は、あまり古くはない。其處へ着いた日の夕、部落民の話はたま／＼この近くへ現れる狼の事に及んだ。人手少く、そのため時々羊を掠められる、とこぼす。請はれるまでもなく、血氣の面々、おの／＼手に唾きして警備の部所に着いた。

小屋は四圍に土塙を繞らし、その内に羊、山羊の類うよ／＼と飼育してある。狼は殆ど毎夜の如く、この五尺の塙を越え、極めて柔順な小動物に危害を加へるのであると。塙の外は砂丘

の起伏がしばらく續く、彼はその續く砂丘の彼方から、やつて來るらしい。我等十人その砂丘の望界線に身を伏せて、さあ來い、きたれと銃器を構へた。

あやめも分かぬ野のはてを、鳴りをひそめて、睨み廻すこと暫時。だのに、狼はもとより、鼠一疋さへ現れない。刻一刻と過ぎ、遂に半夜を過しては、聊かならず倦怠、倦怠は當然睡魔を喚ぶ。こは怪しからずと余まづ口を切つて、狼不來ウルフコト、明日の旅程もあり、こゝで切上げては如何にと、云ふ聲終らぬに、眩で制した王百俊、狼は人語を解す、必ずや言ふ勿れ、と小音ながら嘯として嚴かである。それもまた然かあらんと、再び睡眼に力を入れる。十一時、十二時を時計は廻つてゐたのであらう。暗くつて分らないが、星の様子では眞夜中になつたらしい刻限。こたびは王氏なんとしてか、大欠伸一つ、睡た氣なだみ聲して語り出す。

全體、狼を護るに斯うした方法は大間違ひだ、と冒頭まづ以て貶し倒し、先刻、余を制したよりも、大きな聲して曰く、わたし國(滿洲)古來狼を捉へるには、狼の常に出沒する邊をねらつて大きな穴を穿ち、そして一人その内に、一疋の仔豚を擁して潜む。他の人等穴の上へ柴を渡して蓋とする。その際僅か一疋を入れる小穴を残して、他は一面土砂を撒いて終ふ。これが即ち狼穿と稱する仕掛けだ。夜となり、四邊寂寥となるを待つて穿中の仔豚を啼かす。狼

これを知り、よき獲物ぞと舌舐めずつて近寄り、彼の小穴より前肢挿入、摸索する。冨中の人、は得たりとばかり狼の脚を捉へ、しかと掴んで放さない。此機を逸せず、他の人々は躍り出て内外協力してこれを捕へる譯だ。鐵砲なぞと違ひ、斯うしてやれば必ず獲れると保證した。それから、この方は少々慘酷だがと、前置きして、更に話し續けた。

昔、遊俠拳士の徒が護身のため、夜間就寢に際して狼皮を敷く、怪しい者が忍び寄るか、また火災異變のある時は、突如剛毛が針の如く逆立つて肌を刺し、その災害を豫告する。それ故には仇を有つ身、また長い草鞋を履いて世間を狭く渡つてゐる者達は之を敷いて寝るといふ。この靈能を有つ毛皮は、どの狼でもよいかといふと、さうでない。第一これを得る法にしてからが、他のそれとは全然異つてゐる。

その方法といふは、捕獲と同時に、生き乍ら四足の端を裂き、肌皮をめりめりと、引き剥がす。頭と背筋の部分のみ身に附け残しておいて放つ。狼は、さすがに絶え入るばかりになるのだが、元來、根が豪傑なのだ。赤肌の上に僅かつながれた毛皮を、マントの如く煽りつゝ、呻きを上げて走りのがれるのである。

人は、枯草を染めなす血潮を辿つてゆくと、彼の狼、多くは一里に至らずして倒れ伏し、氣息奄々としてゐるのである。それを大聲あげて、得物を揮つて近寄ると、彼は更に、氣を取直して逃走にかゝる。が、すでに力は盡きてゐてもう走れないのだ。たゞ牙をむき、眼を瞞らしめて、寄らば飛びかゝらうとする。そこを手取り足取り、大勢で押へつけて、残りの皮を逆剥ぎに引きはぐ。かうして得た狼皮には、その狼の怨念と腫毒の憎恨が凝り固まつてゐて、一種言ふことの出来ない靈が籠り、時と事に際して、靈妙不可思議な働きをするのである。殊に人籟途絶えた寂々たる深夜にあつて、うさん臭い人影や、また危害を爲すが如き氣配があると、忽ちその毛は逆立つて、寝てゐる者の肌を刺すのであると。

此の話は、仲々に面白い。狼の現れぬことに由つて、計らずも斯うした説話の聽けた事は思はぬ儲け物だつた。王君の意外に興ある談話は、まだあとが有るらしい。狼よ、今しばらく出づる勿れと、念ずるとは知らず、王君また話す。

扱て、今話したのは、昔からの言傳へ、これから語らうとするのは、實際に有つたこと、その目に會つたは、吾が家の親父で、それがまだ若い時分の事だつた。父親がはつきりと、これを記憶してゐて、機に觸れては話したものだ、と前置きしたからには、これこそいつはりなき實話ならんと拜聴した。

所は、奉天南門外、南塔から僅か距れた五里河子といふ小さい村、農家趙某の小孩で齡十歳になるのが、野に豚を見張りつゝ遊んでゐた。以前から此邊、夜ともなれば古狼が現れて仔豚山羊などを攫つた事もあつたが、當日まだ日は高く、殊に家の近くではあり、趙少年は固より、家族の者も、別段氣にとめて居なかつた。

ところが、何うして、俄かに一頭の大きな狼が現れた。豚には一向う眼もくれず、矢庭に小孩めがけて飛びつき、あなと云ふ間もなく、襟首を咬へて、一と振り振ると背へのせかけた。狼は、しすましたりと思つたか、その儘千里廣袤の野を馳せ去らうとする。この時其處へ折りよくも通りかゝつた王君の父親、その頃はまだ若く、屈竟だつたに違ひない。大聲あげて衆を呼び、必死に成つて追つかける。少年の父は狂せんばかりに愕き、得物かひ込み、あと一散に追つてゆく。野良に居た人達も、これを知つて馳せつけたから、狼も策盡き、地に小孩を振捨て、逃れ去つた。

その小孩が長じ、老いて今日に及んでゐる。頂部咬傷の痕を撫しつゝ、常にその思出を人に語る。「このはなしうそないぞ」と力をこめて言切つた。

この時余は先刻聞いた、狼は人語を解す云々の事に氣着き、ひそかによい乎と念を押す。王

氏、こはしまつたりと、眉宇を少しく寄せたと見えたが、忽ち顔を解いて曰ふ。こゝは蒙古狼また蒙土の産、何とて日華語を知るや、安心するよろしい、と。言切るや、突然、闇をつんざく銃聲、ややつ、と意氣こむ間を、又一發。又一發。

塔の南面を護る一團、それ出た、あれよ、あれよと叫び合ふ。うすれゆく月光の下、たしかに黒いもの、二三飛び交ひ、くづれるやうに影を消した。

この狼の内の一頭は、二日後、砂丘のなぞれで、里人のため發見された。胸から肩へその一發を食ひ、瀕死であつたのを捉へたのだつた。

蒙古の地、狼に關した説話は妙くないらしく、旅毎に耳にしたそれを、聞き集めたもの、書きとめ置いたものは、三四にとゞまらない。その中やゝ興味あるものをならべて見る。その中には、我が山國の狼傳説によく似たものもある。多分は出所は一に、中華のそれから來たものであらう。

つこの頃のことか、一族僧が野に行暮れて大樹の下に臥す。夜半物音あり、眼さめれば白衣

のものが集つて、しきりに嘆いてゐる。所へまた、二つの白いものが、遠くの涯てから見えそめたが、それが次第に近くなり、樹の下へとやつてくる。さきの聲せるものどもは、ともども手を執り、さめさめと涙する。

この體に僧あやしみ、そち等は何者にて、いかなる悲しみやある、と問うた。一人が答へてわれ等はこの近き里に飼はれし羊どもである。皆一つ腹から出た兄弟であるが、夜々狼の嬰ふ所となつて、かく黄泉に赴いたのである。あと二たりの弟妹を残してあるが、今宵その二たりもまた狼の牙にかゝるのである。世ひろしといへども、わがはらからの不幸にまさる者がまたとあらうか、思へば悲しくも悲しい事であるよ、と更に慟哭久しきに及んだ。

僧は哀れを催し、手の珠數つまぐつて、誦經ねむごころに回向した。程なく夜は明け放れ、今更にあたりを見れば、樹下に白く散つて居るはことごとく羊の白骨だつた。

或る片田舎に農夫があつた。傍ら羊豚を飼ひ、旅籠をも兼ねなりは、いとしてみたが、數年來狼が出沒して、羊豚を掠めること尋常ならず、すでに少くない數にのぼつた。狼害は、そののみでなく、近來街道を行く旅人さへも全く絶えて、今は旅籠渡世も覺束なくなつて了つた。

主人は一日、番犬を前に、その無能をかこつた。犬は言ひ譯して曰ふには、私が居るがため汝の身安泰なのだ。來春草萌える頃、此街道を通過する老僧があらう、必ず一頭の斑犬をつれて居るはずである。その僧が來たならば、一夜の宿をすゝめまいらせよ、と。

春となり、待つ程に果して一老僧が、斑犬を伴れて通行するを見た。主人は丁重に案内し、布施なぞねむごころに旅情を慰めた。その夜のこと、戸外騒然、物凄しい闘争の聲は、暫時が程ついた。黎明を待つて出て見れば、兩犬は深傷を負うて斃れて居り、そのそばに、見るも怖しい銀毛の古狼が、これも深傷に、息絶えてゐる。主人兩犬の功を賞し、死骸を弾り靈を弔ふために情のありつたけ盡した。以來、街道の賑ひは舊に復して、富を得たとの事である。

その里人は名を宋とよんだ。冬籠りの仕度にと、連日野に出で、草を刈る。一日、秋陽遙か地平を染めて落日に近きの折り、一頭の狼が風の如く現れ、彼を望んで牙を鳴らして來た。

宋はもとより勇ある者、利鎌を揮つて少時應戦に盡した。けれど狼はその内に、みるみる數を増し、今や彼絶體絶命の境に立つた。辛くも積上げた刈草の堆き上に駆けのぼり八方防禦につとめ、必死をかける。一挺の鎌も、斯うなつては唯一の武器だ。飛びかゝる狼に片端から傷を

負せると、さすがの狼も、相手の高所に在つての抗争には不利なるを知つてか、陣を後へ退き、虎視眈々持久の戦ひに移つた。が、それも決して拱手傍觀して居るのではない、隙こそあらば、卒然躍りかゝつて、引裂き呉れんと構へてゐるのだ。

すると、この折り、群を分けて一疋の年古りた大狼がぬつと現れ出たと見る間、嵐の如く砂を蹴り、疾風の速さでとびかゝつて來た。しかも彼の狼、上の宋には眼も呉れず、積み上げた枯草の裾、それを咬へて、引抜き、飛びしきるのである。考へたりな、されば他の狼これに倣ひ、駈けは來り、驅けは來り、草を口にしては退く。さしにも山なす枯草も、見る間に、寸尺、と崩れ、低くなつてゆく。

宋は慌てた、これはいけない。最早斷末魔に近く、危急存亡だと知つても、如何ともするすべがない。此時、天は一人の道老をよこしてくれた。齡百歳を越えたかと思はれる道士が、いづれよりか現れて、此の様子を眺めてゐたが、やがて手にする杖で大地を打つた。その音迅雷の如く、狼群は俄かに慌てふたぬき、蜘蛛の子と散つてゆく……。

宋は草上よりとび下り、地にぬかづいて禮拜した。御老人は何處の賞き方にましますや、と訊ねると、老人は語らない。いづれからいづれへお越し遊ばすや、重ねてと問ふに、又言はな

い。今宵は拙宅へお憩ひ下されたし、とうながすと、老人はうなづいた。その夜大いに歡待を盡したことは申すまでもない。

翌朝、後圃に隣り隣人の聲がするので、驚いて馳せつけてみれば、豪駝の親と仔が、見るも無慘にしたたか喰はれてゐる。

宋、驚愕。かの老仙の室へ取つてかへすと老人すでにない。あたりに散る足跡を見るに、人間のそれではなく、たしかに獸類。しかも、よくよく望めば、四つ足にあらず、奇怪至極の三つ足だつた。

故老は曰ふ、これ恐らくは、狼の老耄であらうと。

茲に、狼のことが出たから、狼に就き少しく書きぬいておく。

狼は狼の族。「鶴魁考」によれば、生れ乍らに一足を缺くといふ。依つて、他の一疋に附いて、前肢の片脚を二脚となし歩行するといふ。即ち狼は三足獸ゆゑに、一疋では歩行が覺束ないから、二狼體を併せ、授け合ひつゝ行くのであると。

尙、狼は、狼に似てそれより猛惡、常に狼と組み、狼に騎して餌をあさる。狼餌を求めれば狼まづ食ひ、終ると直ちに狼の背に跨る。狼が、狼の食ひあました食を求めようとするとする時に

は、狼は狼に馳驅を命じ、傲然として風を切つてゆく。役者は確かに一枚上なのである。狼が狼から降りて、食を食つてゐる時、不意の奇襲にでも會ふと、彼は極度に慌て、戸まどつて狼を負ひ、狼周章して狼に騎すとも言はれる。蓋し狼狼の字源はこゝにある。

また一説に、狼は前脚殊に短く、常に狼に騎して野を行く。一旦誤つて狼にはぐれる時は、大いにあわて騒ぎかなしむとも傳へられて居る。

狼が、牛馬の群れを襲ふを聞くに、まづその腹のあたりを急に噛む。牛馬は傷手に狂奔して群を放れ、暗雲に突走る。狼は、してやつたりと、悠々その後をしたつてゆき、牛馬の倒れてゐる所へ近づいて、ゆつくりむさぼり喰ふのだ。駱駝となると、その場で、咽喉笛に喰ひつき、生命を奪つてから喰ひにかゝる。彼は肉よりも臟腑を好み、脾腹を大きく喰破つて、内臟を焚食する。

蒙古地誌によると、狼には二種類あつて、土狼といふのと、白眼狼とがそれだ、白眼狼は、眼の周りの毛色が白いのが特長である。土狼は身長四尺許り、高さは二尺餘にして、春夏の頃は體毛黒味を帯び、秋ともなれば黄色に變じるが、冬は白色を呈してくる。みなこれも保護色である。

狼の族で、狼蠱といふのがある。その體色淡黄で、身長は裕に五尺に達し、高さは二尺内外性最も残忍で、これに會つたら機先を制せぬ限り、こちらが危い。機先とは、發砲、それに次いで銅鑼の如き、大鳴物。夜なれば火炎烘燒である。

狼の肉は喰つて喰へぬことはないが、美味ではない。毛皮は市に賣れ、敷物となり、斗蓬トウポンと稱する、防寒用引廻しの如きもの、裏に用ひられる。

扱て此處らで、さきに焚いた狼糞の始末を忘れまい。それには此の品の出所だが、これをも語つておく要がある。

或年の夏、奈曼旗のチャガンピルマを、眞夜中の二時に發つた。行くさきは同じ旗内のガチルボーラ。道は砂地砂原、どこまでゆくもゆるやかな砂丘はあるが、山も森も林もない。折り／＼に杏、榆、枳等の低く地を這ひ、羊草の瘦せた草むらが風になびく、雨模様。

その倭樹や、草の間から、兔、雉子、野鷄の類が、いきなりに飛び出し、要らぬ膽を冷させた。その内全く夜は明けはなれ、雨も歇む。

ふと見ると、行路の先き、また顧るに、うね／＼と續く砂地のあちこちに、異形なかたちの

獸の足跡。踏んで間もないか、印した痕もはつきりしてゐる。たしかに狼だ。

それが幾頭も居たのらしく、點々と續き、何正かのが、重り合つてゐる所もあり、途中で消えて途切れてゐる個所は在つても、その進む方向は一定してゐるらしい。その方向にまた我々も行くのである。あまり氣味よくも思へぬ。

少しく行くと、砂丘のかけに在つたのがその狼糞。昨夜どこかで羊か、それとも鹿をやつたらしく、糞中白毛をまじへて灰綠色、臭氣甚し。罐詰の空罐に悉く收め、持つて歸つて一年その儘にしておいた。この朝思ひついて取りいだし、狼煙の實驗にとりかゝつた次第だが、これは然し古人の説の如くには顯れない。やり方も、場所もその混ぜものも全然違ふからであらうが。

蒙古千年、牛糞を干して燃料とし來つたが、牛のそれは火氣柔らかく、煙り出でず、殊には火持ちがよい。依つて古來粥を炊き、苦茗を煮、その他劑煮適宜に用ひる。羊屎は火氣頗る強く、容易に消えぬ所から、従つて冶金鍛鐵に用ひられた。

狼糞は、その特徴煙にある。風吹くも塵かず、煙の色白く濃く、暗夜にもよく知るを得る。古く戦國の世、すでにこれを知つて、緩急の場合、味方各營堡への警報とした。今も長城を始め、諸方の城址に遺る狼煙臺は、もとより是れを焚いたところ。また略して狼臺、また煙

臺、或は烽火臺、狼火臺等々、時代と場所とで、それぞれ呼び聲を違へたが、要するに本來同一物である。滿洲では籠子窩から三里の新濠子と、滿鐵本線首山の狼臺は名高い。

近頃科學の發達に伴つて、狼煙の料となる狼糞の正體がはつきりして來た。そして是れは狼の糞とは似てもつかぬ硝石であることが判明した。硝石は狼糞や塵芥などが蓄積し腐敗をきたして生ずるものださうだ。殊に雨の少い地方などには、白く結晶して「腊ろう々」として鹽雪を握るが如く」に生じるらしい。その硝石は、焚物に混ぜて用ひると、紫青色の煙が立ちのぼり、火氣また熾烈であるといふ。北方女真人が、鐵製の筒にこれを詰めて點火し、石礮に用ひたが、これには尙硝石のほか、硫黃、磁末、鐵屑、柳炭、砒硝などを併用してゐる。

硝石を狼糞なりと信じて狼煙に使用したのは随分古いことで、周の幽王が、徒らに是れを焚いて社稷を失つたは名高い話だ。

狼糞、煙氣直上、強有烈風不斜の文句で知られる通り、これで焚いた煙は、風のために斜めに流れることがなく、天をさして眞直ぐに昇るから、兵家の通信機關となつたのだ。するとこの煙は、今日の毒瓦斯のやうに、重いものであつたらしいが、また一面、空へ直上する所から見ると、力の強いものなのである。

(附) 左 宗 棠

清末の猛將左宗棠は、咸豐から光緒にかけて大いにその才能を現はし、文官の李鴻章と並んで文武の双璧と謳はれた清朝名臣中の屈指であつた。咸豐二年長髮賊の湖南侵入に手柄を立てたことから、曾國藩に認められ、「湖南に一日と雖も宗棠を缺くを得ず」とまで、激賞された人物だつた。

同治五年甘南地方に起つた回教徒の亂を平げ、協辦大學士の稱號を得て、亂後の施設に盡粹して居る時の事だつた。附近一帯に狼が多く、屢々里邑に現れては人畜の命を奪つた。その頃の甘肅省と云へば、随分未開の邊土であつたから、狼などはちよい／＼出たに違ひない。

左宗棠はこれを知つて、土地の發展上最も害あるものとなし、殊には人民の不安を募らせる最悪なものと斷じて狼狩りを行つた。兵を要所々々に配し、一方から別の隊伍を進めて狩り立てた所、この大山鳴動の擧に反し、狼は愚か、鼠一疋も出なかつた。それで、これはすでに狼群は此地を退散して、居らなく成つたのであらうといふことになつた。

しかるに、狼の害は依然として毎夜の如くにあつて、役所へ報告されてくる。そのうち城内外の住民の間に、流説が行はれ出した。曰く、此地の狼は古から城内の守護神城隍廟つばねの遺しめであるから、左宗棠といへども、よく人力の及ぶ所でない、と。

宗棠聞いて大いに怒り、城隍神は城及び城の住民を保護する所の神である。それにも拘らず遺しめをして、人を噛ませるとは以てのほかである、と、直ちに兵を引率して、城隍廟に馬を乗りつけ、兵に命じて神像を城街の眞中に擔ぎ出させた。そして神袍を褫奪し、冠を打落し大道へ押倒して、四十杖の刑罰を喰はせた。

これに依つて後日狼害が絶えたか何うかは、知る由でないが、狼が地方の住民によつて、神獸扱ひをされてゐたことが、この勇將左宗棠の逸話によつてもわかるであらう。

葛 根 廟 舞 樂



(神空天左、鬼小體獨右 樂舞のり祭囃喇)

東蒙洮南から齊々哈爾に通じる洮齊線の白城子驛から、この頃、興安嶺の哈倫阿爾山に達する鐵道線が出来た。阿爾山は温泉があるので、この線を白温線とよんでゐる。

白温線では王爺廟といふ驛が一番大きい、それだとして、蒙古のことであるから知れたものである。その王爺廟の一つ手前の小驛が、葛根廟の所在地葛根廟驛である。自分は此の廟へは鐵道の敷かれぬ以前、それはもう二十年近い昔であるが、一度詣り、鐵道敷設の直後にも一度参詣した。

列車がまだ驛に着かぬ前から、この廟は車中からよく眺められて、特殊な建築様式と色彩とが、遠く車窓の右手に展開する。それほど此の廟は大きいのであるが、更に四方が平滑な原野であるから、視界を遮ぎる何物もなく、ために一層よく望まれるのである。

驛から廟までは約二軒ある。一面の草原で、細い野道が一すぢついてゐるほか、乗物も、荷物擔ぎの男も居ない。廟の前には洮兒河の水流があるが、この邊の洮兒河は、まことに小さなもので深さも一尺とはない。土地の者が、草の根株を數個置いて、その上を渡つてゆくやうになつてゐた。

廟は後に岩山を控へ、その麓に在るため土地は少しく高くなつてゐて、建物は南面してゐ

る。その建築は西藏式で悉く方形直線の結合をなすのが、色彩の白と朱を主とするのと共に、甚だ物珍しい。

この喇嘛寺は明代の創建で山緒深く、達賴^{ダライ}軍族の茂林^{モウリン}廟や、新巴爾呼^{シンバルフ}の甘珠爾廟^{カンジュール}と共に、東蒙古の名刹である。廟前に立つて南方を望むと、それこそ眞に千里の曠野。洮兒河が銀一條に光るほか、砂と草、それは緑と代赭の二色で擴がつてゐる世界である。

山門をはいると、門内三列に亘つて十數棟の佛殿がならび、頗る壯大を極める。廟の外郭左右には、僧達の居室が建込んでゐて所謂喇嘛街^{ラマエ}をなす。牡丹色の卷ころもを纏うた老若の喇嘛僧が悠々澗歩して居るのが異彩である。佛殿は何れも四角形で、屋根も陸屋根であるから丁度デパートのやうでもある。造りは平屋であるが、たゞ本堂だけが二階になつてゐる。建築の要所には、相當手を盡してゐるが、何せよ蒙古のことで、見るに足るものは一つもない。然し觀點をかへて、規模の大、その大掛りな所に眼を移せば、斯うした朝北の胡地に、如何にしてこのやうな梵刹が出来たかが不思議でならない。

本堂正面の奥深くまします本尊は菩薩^{ボサツ}像で、兩側に控へる脇侍と共に、泥塑仕立で、丹と碧とで克明に彩つてある。これに隨伴して、この宗教獨特の怪奇な佛や、淫神たちが、ところ狭

きまでに並列し、世にも奇しき紅い繪巻が繰りのべられてゐる。

喇嘛廟の大祭は、どこの寺も春と夏の二回で、春は正月上元の日に行はれ、夏は寺によつて若干の相違があるが、大體陰曆六月の末である。寺廟の祭は中國語で廟會^{ミヤウヘ}であるが、その際の喇嘛寺で行ふ舞樂を跳塔^{トウタ}といふ。蒙古語のツアム、またチャムがそれである。

チャムの筋書きは、何處の廟も同一で、一貫した筋を殊更變へたり、さう思はせたりするやうなことはない。たゞ都合によつて登場人物に増減があるとか、餘興として本筋以外の者が邪魔にならぬ程度に出場し、興を添へることはある。しかしながらこの舞樂を見て、そのなんたるかを知るのは少しむづかしく、臺本を讀んでからでも、はつきりとは判らない。要するに數々の悪魔や邪鬼が現れて、佛に仇をなさんとする、靈獸靈鳥が出てそれと闘ひ、また有難い菩薩が出現し、妙法功力を以て鬼魔を悉く追拂ふのである。そしてチエンロンと稱する三角形のもの、それには幡鼓、即ち彼等の謂ふカバラが描かれ、小形の佛が添へてゐるのを、地上に置いて、これを慰めるのであるらしい。チエンロンは、また一説に鬼魂を象つたもので、これに悪魔を追込むのだともいはれる。チエンロンは舞樂終了後、讀經供養の上、取捨てることに成つてゐる。この宗教的行事は、滿洲總本山、奉天皇寺のそれが一番立派で、且つ盛大であ

る。チャムの催される場所は、皇寺は固より葛根廟でも何處でも、本堂前の廣場をそれにあて、決して舞臺や、神樂堂の如きはしつらへない。樂を掌るのは、登場者と共に皆喇嘛僧で、いづれもチャムの半月程前から熱心に練習をする。當日は本堂の廂下に陣取り、凡そ十人ばかりがそれぞれ樂器を持して擔當する。

着付けや準備をなす仕度部屋は、葛根廟では本堂、一昨年見物した阿羅漢廟も同じく本堂を使用してゐた。これが皇寺だと特にそれにあてる一棟が出来てゐるが、地方ではさう贅澤にいかない。

用ひられる假面は、すべて怪奇極まるものゝみで、尋常の面相なものは一つとてない。その假面は全紙の張子で、木彫りのものは一つもなく、それに類にだけでなく、頭からすつぽり被るやうにこしらへてある。一二をのぞく外は、眼に穴があいておらず、口から見やうに成つてゐるのは、我が太神樂のお獅子と同じであるから、常に彼等は上方を向いてゐる姿勢を持つやうになる。

衣裳は、能く錦繪で見る、鐘籠大臣や關羽將軍の着る唐服様のものを、更にあくどく染め、また刺繍した大模様のもが多い。中にはその古色を呈した時代色豊かなものもある。靴は蒙

古の半長形のそれで、黒色の牛皮に、青い線や模様が縫ひつけてある。

持物小道具は、矛とか劍とか、手鼓、哈達の類で、長大なものを見ない。

舞踊は單純で、振りとか仕草とかいふものには、取立て、言ふ程のものはなく、たゞ多くの場合、テンポが速いので、それだけに見てゐて倦まないが、菩薩舞だけは少々退屈してくる。

これには動きが殆どないからである。

樂器の中には、随分變つた見なれない物もある。同じ喇叭でも太鼓でも、甚だ奇で、一寸他では見られないものである。銅鑼も用ひられ銅簫もはいるが、絃樂器に屬する蛇皮線、胡琴といつたものは使はない。そしてそれには一切歌が添はず、また科白がない。全然無言劇で、たゞその間に、「ソグル・エレツク」といふ經が誦されるのみである。

中國劇が唄ふことを眼目にしてゐるのに、これにはそれが無いから、全然反對のものかと思はれるが、背景や大道具を使はぬところは、それと似通ふものがある。また假面や衣裳に力點を置くところは、我が能樂に似、また東京を中心として存在する、神代神樂二十五座に通じるとも言へるし、追儺の式に似た所もある。

これの行はれる時刻は、燈火の無い昔の蒙古に發祥したもののゆゑに、夜間は行はず、必ず晝

間で、大抵午後一時頃から始まり、二時間乃至三時間で終る。

チャムの始る前には、各種の宗教的儀式や、讀經の数々があるのだが、こゝにはそれ等は略し、たゞ舞樂チャムの一事のみにとどめよう。

その前に、舞臺となる所の院子の情景を一應述べたい。本堂前には、紅塗りの、それも古くなつて大分黒ずんでゐるが、一見わが花車のやうな、太い木製の車が据えてあつて、其上の中央には牌を飾り、その少し後に、チャンチースワン即ち曼茶羅が懸けられる。圍りには獸肉の大塊や、仍餅子、仍菓子オコシの類が、お盛りものとして供へられる。それと甘露を模した、清水の盛られる眞鍮の器なども在る。

花車の兩側、車輪の下に、各五名の僧が坐し、祭りの押へといつた形で控へる。これは押へよりも警護といつた形で控へる。これは押へよりも警護といつた方がよいかもしれない。とにかく紅色の法衣の大坊主が十名くらゐ居らぶのである。この僧等は、終ひまで黙然と隔まつてゐるだけで、どういふものか何もしない。

これと別に、花車にならんで、シホルイと稱する黄色の大天蓋をかざす喇嘛が二人立つし、丹棹に花鬘を垂したのを奉持する僧が、これも二人立つ。それで前に述べた、鬼魂を象る三

角形のチエンロンは、この花車の前方三米ばかりの、地上に置かれる。それから、木竿の先きに小形の幡骸を附け、竿には我が幣束の如く、紅紙を刻んでとりつけたソオリといふ物を立てる。

踊場は、花車を中心に、二十坪ばかりの平地があてられ、その圍りは、それこそ黒山の群衆が、老幼を前に、成人が後に、大體そんな風で立ち群がる。

そこで廟のあるじ達喇嘛は、本堂二階の欄に幔幕を打たせ、四五の役僧、信者代表、旗公署の役人衆に擁せられて、正面の欄に倚るが、昔の大將軍が、閱兵でもするやうに却々横式張つたものである。その日のいでたちを言ふと、パインサー・マアラカと稱する、立烏帽子の如き黄色の帽を眞深に戴き、大禮用の法服チャブを、ゆるやかに纏うて、一聯の珠數ウルホを手首に掛ける。

本堂に二階のない寺、例へば奉天、皇寺の如きでは、達喇嘛の座席は、特別に踊屋臺のやうな物が構へられ、そこが法座となつて活佛の席となる。茲で少し變つてゐるのは、ウブフォンと稱し、年寄りの面を被ぶる福神が出ることで、これは皇寺などにはないことである。この福神は最初から出てゐて、他の舞踊の邪魔にならぬ程度で、あちこちする。別に踊るのでもなく、

ワキ役を演ずるのでもなく、甚だ妙な存在なのだが、大體が三枚目であるらしく、他の者の舞踊中、それを故意におどけて眞似たり、見得を切つたりする。また時には觀衆に對つて惡態をついたり、態と自分で轉がつて見たり、小坊主の頭を叩き廻つたりして、さまざまに笑ひをかふのがこれの役であるらしいが、少しくどい。それにこの老人面は甚だ作が拙く、押潰したやうな平顔で、何んの潤ひも愛嬌もない。衣裳は白羊皮の大袍、而も長毛の密生したのであるから、夏祭にはとても暑さうだ。常人も相當應へるとみえ、時々顎へ手をかけては、面を押上げて風を入れてゐる。

チャム最初の登場は、獨體小鬼ハホマエである。ハホマエは四名の喇嘛小僧の扮するもので面も衣裳も、四人が四人とも皆同一、背恰好も殆ど同じ位なのを選ぶ。踊り手は子供なのにその獨體面は非常に大きく、例により頭からすつぽりとかむる。この獨體の色は無氣味にも白く冷たい所謂白骨で、眼はうつろに穴があき、見るから陰々として、まことに儻々相貌だ。うなじから背なにかけて、一枚の白布をしらじらと垂らす、これもなかなか不吉のあらはれのやうで、氣味がよくない。衣裳もまた白が主體の筒袖で、袴と膝のあたりに、黄、青、黒の彩りがある、青き長靴、手に一本の桴を持つ。

獨體面ハホマエの小僧は、四人が四人、同一の動作を繰返す。手を上げ、手を上げ、足を上げ、足を上げ、クルリ廻つて顔が合ふと、念にもろ手を腰に當て、双方一緒にお辭儀する。これが實に、その姿に似ぬ滑稽さがあり、その都度觀衆は、どつと聲をあげて笑ひくづれる。

これが済むと、銅角ビシグルが、中老喇嘛の樂長格の僧によつて吹鳴らされる。これを吹く僧は、皆の者より少し離れた、一眼で舞場の見える所に座し、一場面終る毎に、ビュウラララと相當長く吹き鳴らす。この笛は一つの場面が済んだことを宣すると共に、次場のきつかけを爲すものだ。

踊りの最中に、スレンと稱する銅鍍子が、絶えず鳴らされる。これには二た通りあつた、膨らみの太い方は、チャンと呼ばれる。銅鍍子と共に、常に鳴らされるのは、長い柄の附いた大太鼓フングリコである。これを叩く桴は「?形」を爲しテホオルといふ。實を云ふと、フングリコとは太鼓の總稱であつて、長柄の太鼓にはまた別の名稱がついてゐる。

喇叭にも二種があり、前述の銅角ビシグルもそれだが、いま一つサンドンと云ふ、素晴しく長い大喇叭がある。形は非常に長く、全部が眞鍮で出来てゐる。平常は寫眞の三脚のやうに四尺ほどに疊まれるが、吹奏の際はづる／＼と引張り出し、一丈數尺に伸ばされる。それで先の

開いた方を、約二尺四方ほどの臺に載せる。その臺には、四個の小車が附いてゐて、自由にいづれの方へでも向けられるやうになつてゐる。葛根廟のそれは、その臺が黒い牛につくられてあつて、牛の背に喇叭の先きが載るやうになり、牛の鬣まつた下に小車が附いてゐた。このサンドンといふ名は元來西藏語で、蒙語ではこれをブレと呼ぶ。サンドンの音は、どうも樂器といふ感じに遠く、ブルルルーンブルルルーンと、あたかも怪獸の呻きのやうだ。吹くには餘程の力が要るか、呼吸器も強大さうな、屈強な壯年喇嘛が擔任する。いつも二挺そろつて吹かれ、吹くには兩膝を張り、頬膨らして大汗で眞赤に力んで吹くのである。

ハホマエが引込んで終ふと、暫く掃舞臺で、銅角が二挺、音を揃へて、ヒューラヒューラと鹿の鳴き聲のやうに鳴りつゞける。これが止んで一瞬すると、今度は前のは違つた賑かさで、樂が再び開始される。すると、わあつと群衆の聲だ。

何事かと振りむくと、樂屋である本堂から、いやもう實にこれこそ何んとも言へぬ顔つきの先生が、而も二人、打ちそろつて飛出した。白面にして巨眼、拳の如き大鼻、束子の如き眉、分厚な唇が赤く開いて、だらしなく笑つてゐる。この面妖さを更に強調する如く、赤、青、黄で段だら染めの帽子を戴き、黄の太い筒袖、赤帯を胸高に締めて、黒に青線を縫ひつけた蒙古

者を履く。二人が二人とも同一の出でたち、ニタリ、ニタリと笑つた顔で、手拍子足拍子、變手古に踊る、氣味の悪いつたらないのである。これが天空神アソリである。

天に三十三層あり、その又下界に九天が在るさうだ。その三十三天と、九天との中間が、いはゆる天空で、その中間天空を支配するのが、このアソリ先生なのである。

銅鼓子は打鳴らされ、フングリコは連続的に而も急調子だ。その合間々々には銅鑼がはいり騒音と言へる賑かさで囃したてる。拳固を振廻すのがすべてのやうな、アソリの舞が終ると、例によつて銅角が響き、樂の音が一變する。今度は至極ゆつくりとした音色と調子で、流るゝが如く漂ふが如く、翫々と聞えてくる。この鳴物につれて登場するのは、怪神でも、グロ佛でもなく、普通の人間なのだった。

假面を用ひず、それでゐて顔に何等粉黛を施さず、全くの素面である。しかし身に着けた衣裳は異様で、黄色の絹衣に、五彩の縫を斜線に配したのを着、青磁色の派手な絹布を纏にあやどる。笠形の大帽は黒漆で塗られ、その頂きには山鳥の尾羽が數本さゝれてある。帽の頸紐はわが昔の鳥追ひ娘のやうに眞紅の絹をゆつたり結び、見た眼は實に優美だが、眞黒な素面と、陽に焦げた兩の手先は幻滅ものだ。その右手にはタンペロとい、いふ小さな鼓を持ち、左手に

獨結を持つてゐる。獨結は西藏語でドルチイといふが、これが専ら蒙古でも行はれてゐる。タンパロといふ鼓は、皮の張つてある面が、經四寸程の楕圓形で、それが二個つなぎ合せてある。それは人間の男女の體頂骨を背中合せにし、人間の皮アラスを張つたものである。これが古く成つてゐて、一見何んで作つてあるのやら見當もつきかねる程だが、それと聞いては見直さずには居られない。で、能く見ると、確かにそれなので、急に不氣味な感が起り、手にするものも躊躇されてくる。これには牡丹色の厚いリボンが二枚結んであるが、實は一枚で、ネクタイのやうな結びかたから二枚に見えるのである。

この者は鼓と獨結を交互に振りつゝ踊るのだが、この踊りは至極のんびりとした動作で、且つ變化に乏しく、その上無表情だから、退屈を覚える。暫時あつて、これと同一扮装の者が、次ぎ／＼と出てくる。二十有餘名、ぞろりと出切つて終ふと、圓陣をつくつて、踊りながらぐる／＼と廻り出す。着付けは同じだが、色彩が銘々違ふし、持物も又同一ではない。ホルブと云ふ三結を持つ者、ホムホといつて、一端が獨結、一端が振鈴となつてゐる物をもつ者、リルブといふ振鈴のみのものを手にする者、それからトムと云ふ貝笛を執る者等さまざまである。だが、この圓陣踊りも、ただ樂の音につれて、萬べんなく手足を動かしてゐるに過ぎない。こ

れは淨土の菩薩ガラオホに扮したものだとも、またタハラと稱する冥府の神官だとも聞いたが説明者によつて違ふのではつきりしない。この者等は己れの踊りが濟むと樂屋へは戻らずに、舞場の兩側に胡坐し、次ぎに出てくる演者のそれを見物するのである。

すると間もなく、俄然鳴物が活氣を呈し、勇ましく打囃される。同時に怪奇な大喇叭サンドンが、老狼オウロウの如く四邊をゆすつて遠吠えする。ついで四面のフングリコ即ち長柄の太鼓が劇しく急激といつた調子と音で打囃らされる。と、突然姿を現したのは、黒色の鹿面に、双角を振り翳さした一怪神だ。右手にはギラギラ光る三尺の矛ヤブチータを執り、左に一條の索を束ねて確つかとにぎる。オドロン、オドロンと響くサンドンの音に乗つて、とぶがごとく、舞場一ぱいに跳り出た。これこそは、能く萬年の劫を経た神鹿ボオガ、またはボクとも言はれる怪神だつた。

神鹿ボオガは盛に跳躍的の舞踊を行ひ、時に劍を翳して敵を刺す姿勢をなす。それかと思れば、忽ち跳び退いて、身を低く地上に伏せ、蜘蛛の如くになつて隙を窺ふ態を示す。さうかうする内、左手の索條は、五彩の美しい哈達に代り、劍は、振鈴ホムホに取りかへられる。持物が改まると樂の階調が緩徐となり、それにつれて手振り足拍子も、悠々として迫らざる趣を示

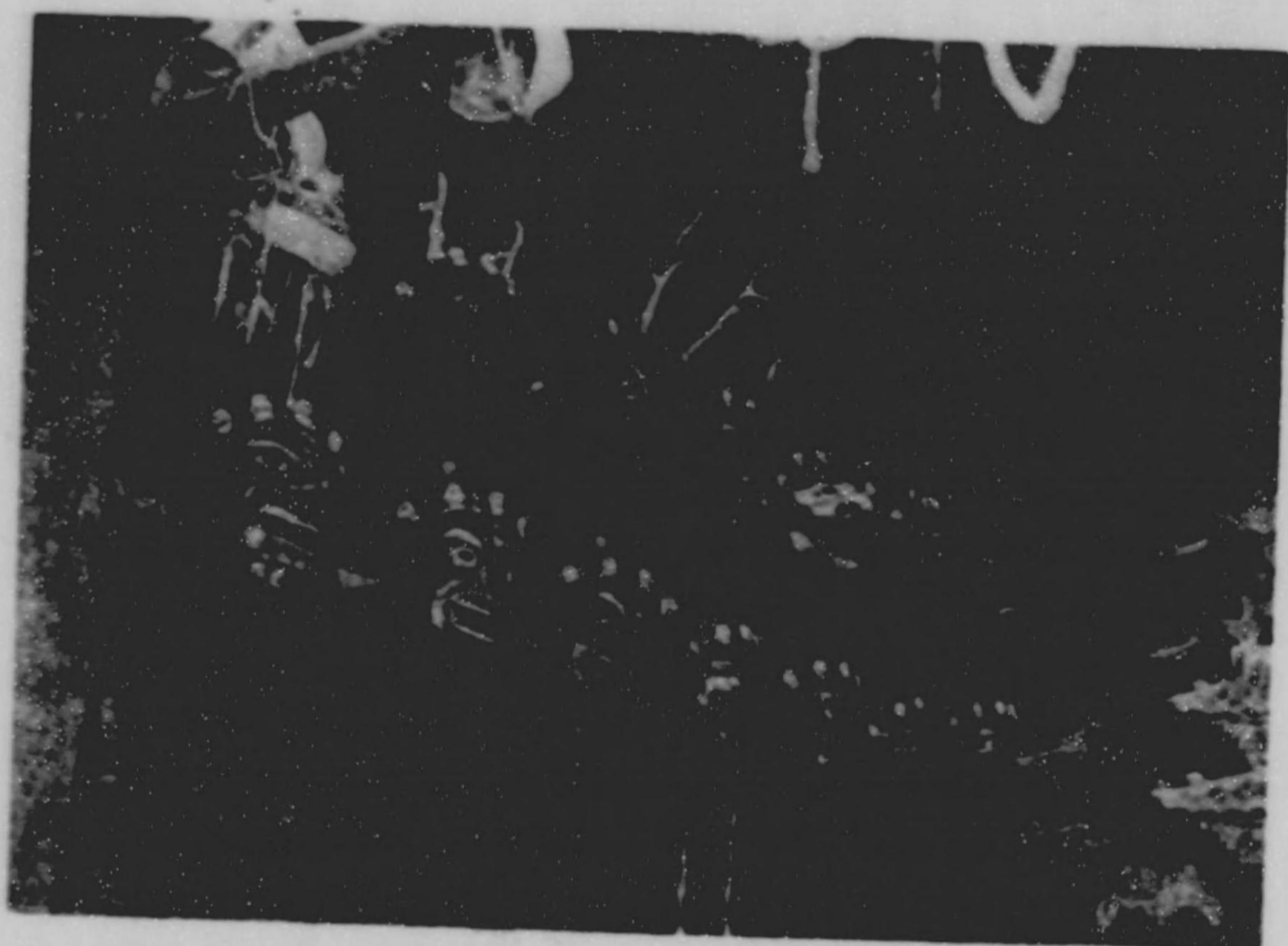
してくる。この一段が終ると、また例の銅角ビシグルが吹かれ、次いで鳥面カルダの舞となるのである。

カルダは佛鳥迦樓羅で、佛説によると、金翅鳥とも稱され、極めて大きな化鳥である。翅翼はすさまじき金色に輝き、その翅を張るや、實に三百三十六萬里、日々須彌の四海を巡り、時に天龍を獲て喰ふと、頸には常に念珠を掛け、嘴は火焰を吐くと云ふので、赤々と彩られる。喇嘛教界にあつては相當重んじられてゐる靈鳥で、繪畫や彫刻の類にも澤山遺されてゐるし、經文の中には、隨所に出てくる。

だがこゝでは、その物々しい扮装に似ず、仕草はあまり極は立たない。時の演者の技の如何にも寄ることだが、どこのチャムでも、派手な動きも存在も示さない。

次ぎの登場は、天空神アソリに似て非なる、コムと稱する魔神であつた。アソリの白面に比し、これはどす黒い顔で、肉瘤の如き丸味のある角が額上に三個突出してゐる。耳朵に眞鍮の太い耳輪を下げるが、この耳輪は蚊帳の環よりも太くて大きい。

然しこのコムなる神も、アソリ同様、にたにたと笑つてゐるのだから、凄味がなくて滑稽で



喇嘛祭舞樂川假面

さへある。またコムがアソリと似るのは、二人一組となつて踊ることである。廟に依つては、これを全然省略する所もある。コムは、両手に一本づゝ短い桴カサテホルを持つ。

そのあとへ引續いて出る魔神はマカラである。マカラは白面巨口、口は眞赤に耳まで裂け物凄い牙が口角を突いて現れてゐる。眼は大きく長く、それでゐて眼尻が急に下がり、どろんとしてゐる。眼だけ見たのでは決して凄くはないが、眉は太く逞しく、大なるブラシのやうで、而も峻しく吊り上つてゐる。頭上に一個の寶珠を載せ、赤い毛を下げる。どうにも形容の出来ぬ顔だ。この神は、ドルチと稱する長い錫杖を振つて舞ふ。

右のコムは、單獨で踊る場合と、ザアナムと一緒になつて踊る時とある。こゝでは一緒に同じ振りで踊つたが、コムは白面に對して、これは青面、衣裳の色彩も全く反對のものを選んで對照的になつてゐた。

ザアナムは龍面にして象鼻、鋭い牙を持ち、頭に一角を戴く、これは彼の勇壯な靈獸龍をかたどつたものと聞いてゐる。とにかく恐ろしい顔つきの魔神で、スーホと云ふ鉞ツルギを無精にふり廻し、コム神と共に跳廻つて、荒狂ふ。

縦横無盡の力演が終つて、兩神銅角の音に送られ、疾風の如く退場する。と大喇叭サン

ドンが、嵐の如くに鳴り渡り、牛面の大魔神ソクが悠々として立ち現れる。

ソクは顔の形宛然牛である。そして口と眼は鬼のやうに大きく恐ろしい。色は濃藍を流した如く、頭上には牛ゆゑに太い双角を生やす。この神は俗にいふ牛頭天王ビョウトウテンノウで、盛んな精力と熾烈な意慾とを持ち、女神と相ともに、陰陽歡喜の象をなす天地佛の一雄である。三尺の劍と獨鈷ドコとを持ち、銅鈸子の鏘々たるに合せて舞ふ。この時最初に出た獨體面の小鬼數名が出て、ソクにからみ、右に左に跳ね廻つて場面を賑かにする。ソクはその間、無暗と矛を揮り、跳躍し大見得を切る。

ソクが退場するのを待つて、サンドンが急調手で鳴り出すを合圖に、今度は魔神中の大魔神ヤマングクの舞となる。

ヤマングクといふ神は、ドクシト・ブルグハン即ち瞋恚忿怒佛で、その中での頭目と目されるものである。地獄の總統閻魔大王はこれで、別に裁きの神ウルリクワンともいはれる。これに扮する喇嘛は、一座中でも座長格がなるのだから、役柄も一番重い。その意味か出場に際して奏する音楽は、頗る莊重味を帯び、場中を壓する如くに響き渡るのだつた。

鳴物の前奏と誦經の聲が、ややしばらく續いて、やがてのことヤマングクの出となる。數挺

の大喇叭は、沙漠の砂を吹返へす大風のやうな音で連続的に繰返され、この大魔王を一層引立たせる。銅角がサンドに和して蕭々たる響きを立てると、青袍黒面の忿怒佛は儼として花道に立つ。三眼巨口、色あくまで黒く、兜の前立の如き角を、によつきりと額上に立て、右に破邪の劍、左手に三鉈ボルブを握る。身は地獄界に在つて司法懲罰の大權を把握し、獄卒羅刹を隨使して、多くの亡者共から最も畏怖されてゐる大王であるが、尙且つ一日に三度、天魔のため、口へ熱銅を注がれる苦惱がある。それで口は眞紅に焼け爛れてゐるといふ所から、赤々と紅燄のやうに彩つてある。演者も座頭格であるかして、姿態も落着き、どつしりとした態度を見せた。

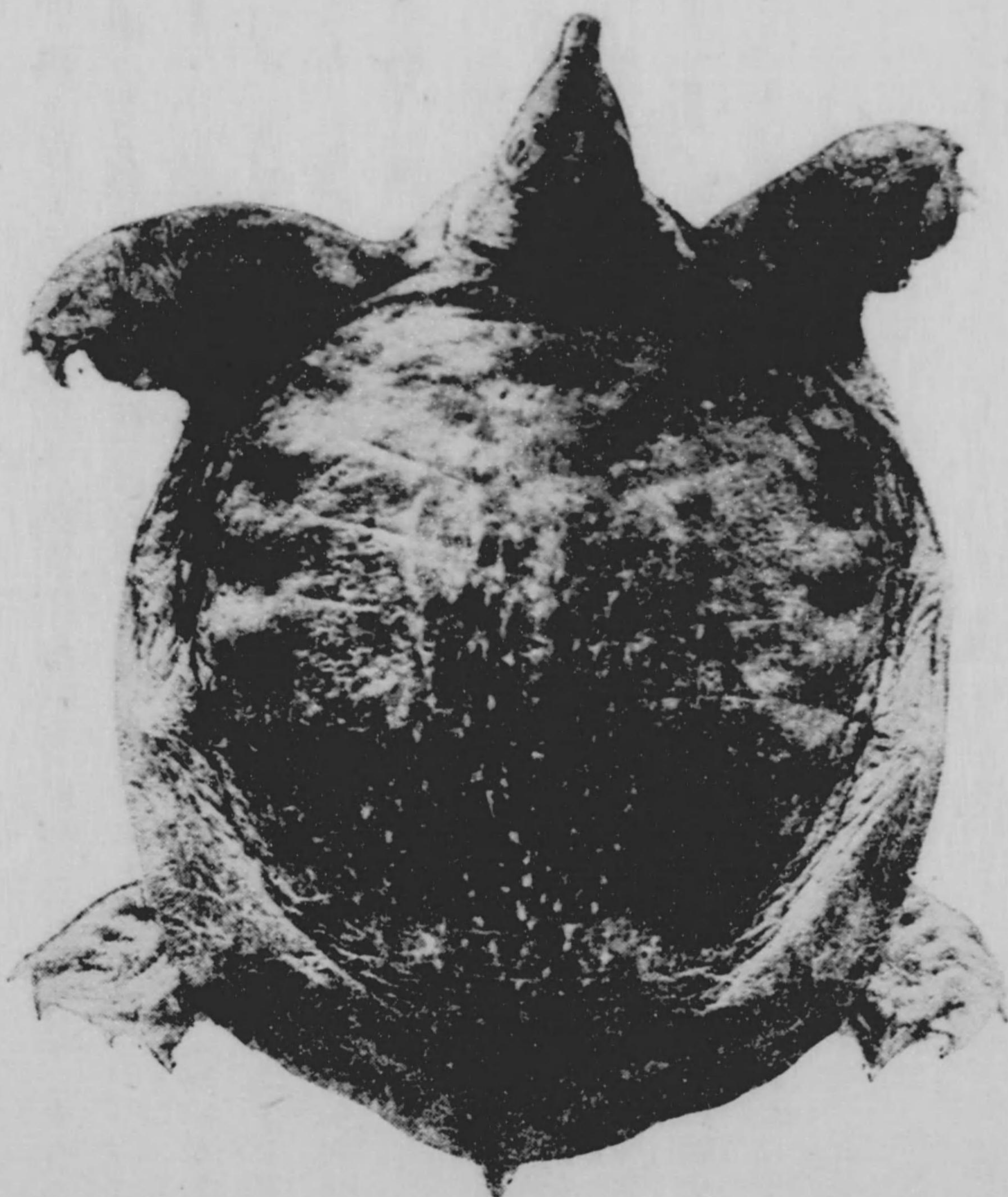
閻王の舞踊が一應あつてから、今迄に出場したすべての神々と、菩薩神官達全部が、これに加はり總踊りとなる。そしてぐるぐると踊りめぐる。この時鳴物は一層賑かとなり、銅鑼大平蕭の類まで一度に打囃され吹鳴らされて、益々豪華な繪巻を繰り展べる。ゾグル・エレソクの經文は、各喇嘛の口から、一齊に發せられ、觀衆また唵嘛呢叭嘯吽の唱名をとへ出す、耳も聳せんばかりだ。

やゝあつてから、階上の正座帷幕に構へてゐた所の大僧正は、やをら法杖を突いて立ちあがる。靜かに階を踏んで下り立ち、舞場のよき程の處へ臨むと、鳴物が突然兀として止み、瞬間寂として音を斷つが、直ぐに唱名の聲が、潮の湧くが如くに聞え出す。

達喇嘛に扈從する役僧等は、錫杖九連環を突き鳴らし、或は香爐にホーチカ（線香）を立て、先導となり、或は淨瓶ブンバアを捧げ、或はまた、西藏語のロルマ、蒙古語のタラハといふ佛像牌を奉持して、ぞろぞろと整列する。此時もろもろの魔神、邪鬼、神獸等はすらりと左右に居流れ、達喇嘛の祝詞を受ける。

これを以て、喇嘛の祭典の行事であるチャムは、終了を告げるのであるが、このあと僧及び扮装者全部は、その儘の姿で列をなし、寺中を經を唱へ乍ら巡廻して、國土安穩、佛道の隆盛を祈る。その行列は、チャクモと稱する黄色の大幅を戴く役僧數名が、先導をなしてゆき、そのあとを天蓋をかざし、幡竿を押立て、曼荼羅をはためかせなど、大勢賑かに讀經の聲をそろへて列んでゆく。淡々たる曠野に響く銅角の音は、また振鈴蕭鼓の音は、それ等行列の姿と共に蒙古宗教の、華かさと、淋しさの形影二様をあらはし、天空の色と共に寂しい。

綠 衣 郎



龜

龜と性情

背は、ぶよぶよして黒く蒼どろみ、腹は、薄氣味悪い灰黄色。また伸縮自在な首、尖つた嘴に鋭い齒。それから、あの怪的で咒ふやうな、物凄いい眼つき、等々。かくぶさまで、陰的妖味を多分に有つ龜は、その性情はさて置き打ち見たところあまり好感の持てぬしる物だ。

それ故か、中華の人は、極端にこれを厭忌し、その異名の王八ワンパツを口にするのさへ快よしとしない。其上に、龜に取つて、甚だ侮蔑的な因縁を構へ、宜しからざる方にのみ、その迷信と傳説を被せた。世人から爪弾きされ、極度に嫌がられる龜は、これも持つて生れた運命、没法子ナイフツと諦めて居るかは知らず、少し氣の毒な氣もしてくる。

しかし龜も、さうさう悪くのみは扱はれない。一方では、小神と稱へあがめて、神に祀つてゐる。それはささやかな祠ではあるが、獨立した一字の堂を有つてゐる。たゞし小神様と云ふ神は、一部の者しか信仰せず、他は正直のところ敬遠だつた。

一方、龜となると、古くは「禮記」にも、麟鳳龜龍、これを四靈といふ、とあり、慶兆吉瑞とされてゐた。蓬萊の島に遊んで仙鶴と並び稱されて、萬歳の壽を完うする龜ではあるが、形態の酷似するばつかりに、いつしか、龜の不肖と同視され、不吉な忌むべきものに扱はれて終

つた。卷添ひを食つた龜こそ災難、王八、忘八と呼びなされ、蔑視される。

「西陽雜俎」に、朱といふ道士が、仙境廬山に遊んだ折り、不圖傍らを望むと、錦繡の輝しく且つ堆たかくなつてゐるのが眼に入つた。何として此處にこの品が、と甚だいぶかしく思つて視てゐると、みるみる、ひとりでに動き出した。更に熟視すれば、驚くべし、それは一疋の大蛇であつた。大方、錦蛇でもあつたのであらう。

すると、その大蛇は俄かに姿を變じ、今度は、驚くばかりの大龜と成つた。

事の不思議に、此由を一老仙に問ふと、さればそのものこそ、謂ふ所の玄武であらうと答へた。更に老仙の曰ふ。龜の雌は、蛇の雄に交つて子を孕み、それから生れたものが、即ち玄武なのであると。

「大載禮」には、龜穹象に上れば、天下平法地千載、神龜問うて知らざるなく、廣肩にして雄なく、蛇の雄と合す、之を玄武といふ、云々。

天を四區に分つと、東が蒼龍、西が白虎、南が朱雀、北が玄武といふ事になるが、この玄武は、後漢三國の頃までは龜をそれとした。それが南北朝時代に至ると、龜蛇合體の象を示し、隋唐となるに及で、完全に龜と蛇との混血的なものとなり、龜甲を負うて、首尾が長々と伸び

てきた。そして是が、北面を司る神祇として、あがめられるに至つた。が、然しこれは西の虎と共に地住のもので、東の龍、西の朱雀の陽に對する陰である。

この龜と蛇との因果關係が、その儘體に持つていつて取り附けられてゐる。それは、世のあらゆる生物、皆雌雄あつて、兩性相合して子を成すが、ひとり雌ばかりは然うでない、と云ふことになつてゐるのである。然らば如何な作用を以て子孫を得るか、といふ事に及ぶ前に、雌には雌ばかりで雄のない證左を擧げて置かなければならない。或る一定の時期、それは卵を孕む頃を指すのであるが、成育した體を割いてみると、どの體にも、一腹十個乃至二十餘個の卵がはいつてゐる。卵は殆ど球狀で、金柑のやうな美しい色を呈し、體の醜い姿とは、打つて變つた可憐な形と色彩をしてゐるから、誰が見ても直ぐ分る。それが、體といふ體、どれにもこれにも皆悉く身もつてゐるから、彼には雌のみで、雄なしと云ふ事が、合點ゆかう、とかう言ふのだ。

尙、滿人識者の曰ふを聴くと、龜の産卵は、龜のそれと殆ど變りがない。陸地の人目につかぬ所で、尙且つ日光のよく當る所を物色して這上る。後足で巧みに土砂を排し、穴を造つて産卵の上、排した土砂を掩ひかける。掛けた砂の盛上りへ、腹を幾度となく打當て、平らかに

均し、痕跡を匿すと共に卵の安定に努めるといふ。これだけで雌としての勤めは事済である。と言ふわけは、土中に匿された卵は、地中の湿度と、外部からの太陽熱とに依つて、六七十日後に孵化し、小龍となつて、ぞろぞろ這出してくる。だが、滿支人の間では、決して然う簡單には言はず、茲に一流の想像をさしはさみ、それが想像の域から信仰にと進んでいつて、世にも奇しき、因果感を結びつけてしまつてゐる。

龍の卵が土中にある内、その上を、或はその傍を、何者かが通過するとする。蛇でよし、蛙でよし、或は兎、野鼠、鴉、雀の鳥類でよし、さてはまた人間であつてよろしい。その者が雌である場合に限り、その影が其處に射せば、最初に影さした者の男精を得て孵化する。雄性の影が——この場合雄精といつた方が適しい譯合ひだが——たつた一度それにかゝればよいのである。若し不幸にして、そのなかつた際には、この卵は中途で腐り、此世に生を得ることは出来ないと言ふ。

龍は、然うすると、その同族間では子は作れなくて、他種族のそれに依つて、子孫が出来系統を遺すことになる。甚だ本意ないことであると同時に、節操觀念に缺けてゐるもの、君子宜しとしない所であるとされて、皆々からいやがられた。

龍は、言はゞ、みそかごとの事柄によつて、卵すなはち蛋が孵へる。で、この蛋と言ふのがこの國最悪の罵言、「王八蛋」である。人に對つて、「王八蛋」を言ふ場合、己れは命を捨てる覺悟でなければならぬ。然うだらう、「間男の子」と罵倒するわけだから、その返報は恐ろしい。

また俗間に曰ふを聞けば、龜龍の恰好は、さながら蒲團を着た形である。そして足が四本ある。その足は、人の來る氣配があると、急に引縮めて、蒲團であると云ふ甲羅の内へ匿れて終ふ。まつしやうな夫婦なら、何も慌てゝ匿れる必要はない。かくれる所をみると、これは確かに、みそかごとをしてゐる不埒者に違ひないと、へんな風にこじつけてゐる。ますますいけなくなる。

龍を、わんぱと呼ぶ其のわんぱは、忘八と書くのが本當であるといふ。或る時、或は破廉恥漢が其地の書家に揮毫を頼んだ。出來てきたのを展げて見ると、

一二三四五六七 孝悌忠信禮義廉

とあつたので、これでは考へるまでなく、後の文字が足りない。早速出向いて其意を質すとたゞ一言「忘八無恥」と答へたと云ふが、随分無遠慮な男も居たものだ。

胡同の小蔭は、得て行入に依つて不潔になり勝ちだ。それを防ぐため、「君子自重」と貼札して、放尿を戒めてるのを見うけるが、それとならんで、時に鼈の繪が描いてある。若し犯せばお前は忘八であるぞよ、といふわけだ。

それからまた、借老を契つた己が女房を、金持ちに提供し、或は娘を日蔭者にして、左團扇で暮す男は、すべて忘八と呼ばれるのである。即ち他の男性によつて生を得るからで、忘八頭子^{ツバ}などと陰口される。女を集めて財を積む妓館の亭主などは、差詰めそれで、組合以外の所では、何處へ出ても立派な口は利けない。その妓夫を指して忘奴^{ツバヌ}といふから又おかしい。但しいづれも蔭での悪口である。

妓館を賤業としたのは可成り古い頃からで、唐代にあつては、官は法令を以て、普通人との交りをさせなかつた。それを一見區別させるため、妓樓の主人や雇人達には、緑色の頭布を被せた。さきのがつた緑の頭巾は、鼈の頭部を彷彿させるため、四季を通じて用ひさせて平民との差別をした。これが事實とすれば、中華人の鼈を忌む風習は、千餘年前の遙かの昔にあつて、存在したものと見る事が出来る。

彼等の鼈を嫌ふことは、實に想像も及ばぬ程である。いつやら列車の中で、一邦人が籠に入

れて持ち込んだやつが、脱け出て通路へ這ひ出した。これを見た乗客の貴婦人二名は、その場に氣を失つて大騒ぎを演じたことがあつた。

他人に明日の天候を問ふことは、最も忌まれ、夢にも、それを口にしてはならないのは、この國でのしきたりである。といふ譯は、明日の天氣を知るもの、ひとり忘八あるのみだからである。

これを例の「本網」によると、鼈は龜と類を同じくするが、また大いに異なる所もある。それは龜は外部に甲を持つが、彼はその反対で外肉裏甲であると云ふ。また鼈には耳が無く、眼を以て物を聴くといふから尙變つてゐる。

鼈が水中に潜んでゐる時、必ず水面に氣泡がぶく／＼浮きあがるから、それと知ることが出来る、これを鼈津と云ふともある。また鼈は生來蚊を恐れること非常なもので、蚊に刺され、ば直に死ぬとあるが、何ういふものであらうか。それで蚊を煮る時に、鍋の中に鼈を入れて共に煮れば鼈肉爛れて、とても軟くなるといふ。又更に愉快なのは、若し夏の宵蚊を燻すにあつて鼈の甲を削つて少しくこれに交せる時は、蚊忽ちこれに酔ひ、暫くして死滅するとある。

これがなぜ水神に祀られるかといふと、一つの江沼にあつて、種を同じうする魚族が、三千

六百に満つると、蛟龍來たつてこれを害する事になつてゐる。然るところ龍がその内一疋でも混つてゐれば、この災厄を免がれるので、自然魚族から敬はれ、神位を與へられたのだと云ふ。然し同書納龍の條には、この魚族を守るのは、普通の龍ではなくて、納龍といふ一種變つた龍の力だとある。この納龍といふのは、頭も四足も、甲羅から出たつきり、決して縮まることがないさうだ。そしてこれには毒があり、喰つてはならぬことになつてゐる。

序でに、龍族の少しく異つたのを求めると、足が三本しかない龍といふのがある。これもまた毒龍で、これを喰へば五體溶けて血水となり、髪のみが遺るといふ。昔人あり龍を得て妻に料らせ、喰ひ終つて臥戸に入ると、身體は悉く溶けて終つた。隣人その妻の害する所と判じ、知縣に訴へる。知縣は再び龍を得て婦に料らせ、死刑囚に食せしめた所、忽ち溶けて血水と化す。それでその女房は、あかしが立ち放免された。

「山海經」の記載を引いて、従水に三足の龍多し、之れを食すも別段の害なし、云々と有害説を駁しても居る。

珠龍といふのは、身體が、肺臟の形をしてゐる。その肺臟といふのは、漢醫書の圖に見るもので、木の葉を數枚集めたやうな恰好である。そこから頭が出、足が出てゐる。足は六足で、

その足には珠玉が附いてゐて、これが現れると、海上必ず大雨ありと、ある。この珠玉を身に帯びて居れば、男は刀劍の害を免れ、女これを佩せば媚色あり、とある。

龍といふ大きさ一二丈もある龍族が、南方の江湖中に棲息する。これは龍を雌としてゐるといふから、龍の雌のみとは反對に、雄ばかりなのであらう。龍鳴いて龍應ず、龍脂を焼いて以て龍を致す、皆氣類相感するなり、云々。それからこの者は、とても精強く、年を経たのは人を魅すともいふ。その肉を悉く取去つても、まだ生きて居て、尙物を咬む。これを殺して、肉を割き梁桁に掛けてをくと、人の居なくなるのを待つて、肉はひそかに地に伸びてきて、その甲羅に歸せんとする。人の來る氣配を感ずると、忽ち縮んで固の如くなる。

また、このもの、腸は首に直接着いてゐて、肉を悉く割いて除いても、腸と首とが附着してゐれば、數日間死なずに居る。若し鳥が來て、これを攫はんとすれば、怒つて躍りかゝりこれを噛む、といふ程豪氣で強い。

形狀龍の如く其身紅赤、また潮汐に従つてその色至るともあるのが、和尙魚である。これは西海の大洋中に棲み、甲や四足は龍であるが、首は人間で、而も頭髮なく、つるつる頭である。大きさは五六尺に達し、漁人これを見る時は不祥とする。それは漁撈して效がないからで

ある。

漁者はこれを憎み、網に懸る時は、これを殺さんとするに、和尚魚手を合せ、涙を落して救ひを乞ふ。依つて曰ふ汝の命を救けるにより、以後我が漁業に歸する勿れと告ぐ。彼西に向つて天を仰ぐ、これが和尚魚の肯定した形だといふ。この和尚魚こそは、俗に謂ふ所の海坊主だといつてゐる。

大忘八

上元燈節は、年期者の、年期切替へ時である。此國では、商賈の店員、職人の内弟子達に、多少の曲事があつたとしても、正月前には暇を出さない。正月前やまた正月に暇を出されては正月は長い間、何處も休みだから、就職も住込みも出来なからう、といふ情が、主家にあるのである。今迄居た者だから、せめて正月だけは家で遊ばせて置いてやらう、といふ同情がかけられるのであるが、その月十五日の朝食時に、お拂ひ箱となる者の名が食堂に貼出される。そして其日までの給料と、手當を貰ひ、荷を纏めて主家を去る。

またこの日、昇給者の名と給格が掲示され、向ふ一ケ年の給料がそこで決まる。すべて此日

は奉公人の待遇に變動がある譯である。

この燈節を中心に、前後數日間、街に特殊な物貰ひが出歩く。頭に三角の尖り頭巾、色は濃い緑で、肩の方まですつぽりと被る。墨と胡粉で、顔を馴輕に塗りたくり、背に羊皮の襦袢になつたものを、殊更裏返しに被る。これには大忘八と大きく書いてあるが、言はずと、その甲羅に似せたものである事が分る。緑の尖り頭巾は、その首を眞似たもので、成程、鼈によく似た恰好である。そして手には、例の五球の二つある、大算盤を振つてゐる。

彼が、自分自身、敢て大忘八を名乗り、錢を乞ふには仔細がある。彼の言ふ、といふより寧ろ唄ふのであるが、それは

「さあさ皆さん聞いてもくんねエ、僕は御存じの大忘八だ。旦那の所へ女房を質にした、今日は上元御手當て日、さあさ勘定願ひます、たんまり御手當て願ひます。」と、門口に立つて手に持つ算盤をがちや／＼振りたて、大聲にわめく。

何うも質の好くない乞食だが、これも一つの愛嬌で、燈節には付き物ともなつてゐるから、子供や閑人が面白がつて、ぞろ／＼ついてくる。それで若し、錢を與へぬ家があると、彼は一段と聲張りあげ、「御手當が出ないなら、僕の女房返してお呉れ、明日と言はずに返してお呉

れ」と、節面白く、繰返してやまない。事實無根は周知ながら、いかにも體裁のよくない次第仕方がないから、「こん畜生」とばかり、銅錢を投げつける。

大抵の家では、此奴が来て、算盤をかちや／＼始めると、不吉だから、いきなり銅片を叩きつけて追つ拂ふ。然し、假りにも民族を擧げて厭忌する體に扮する事は、いくら乞食達にしても快としない爲めか、この物貰ひは數すくない。

小 神

髓を祀り、髓を御神體とした小神廟は、流石一般の信仰は無いらしい。なにせ御神體が御神體であるから、信仰はさて置き、却つて遠さかる傾向であるが、一面、水に縁ある商賣は然らぬでない。大いに意義づけて水界の主神と爲し、小神様をお祭り申す。別けて井窩子といふ、戸毎に飲用水を賣歩く渡世者にとつては、なかなか有難い神様で、龍と共に、水を司るといふ所から、稼業の守護神として、あがめてゐる。

小神の祭日は、毎年陰曆の六月の八日である。この日水賣りは朝のうち仕事を片づけて一日を休み、お祭りをする事になつてゐる。此日は小神の誕生日で、たとへ一粒にしる、必ず雨が

降るとも言はれ、親しい友人同士の間で、「忘八どん御誕生日御機嫌よう」といつた意味の、洒落言葉を交して面白がる。

滿洲や東蒙の河江や沼澤、またそれ等に續く小流れなどには、髓が澤山棲息し、その形も仲間大きい。

いつやら嫩江の淵で、とつともなくべた一面の髓の居るのを見て驚いた。馬でゆくと片つ端から、どぶん／＼水へ飛び込んで逃げるが、その數の夥しいこと、氣味の悪くなる程だつた。そこでは、數疋を捕へて、食膳にのぼせ、煮澤に喰べた。

滿蒙の河川では、自分の知る限り、この嫩江が一番多いのではないかと思ふ。去る年、一邦人がこれに着目して、人足を雇ひ、それを澤山捕獲の上、内地輸送を實行した。最も速い客車で送つたがいけない。先方に着いた髓は、萬全を期して荷造りしたにも拘らず、一疋のこらす死んでゐた。

髓は、その尿に毒があり、お互の尿毒によつて、中毒死することが後日判明した。で、今の所、現地確詰とゆく他手はないらしい。

嫩江に數日滞在する内、一つの傳説を聞いた。いや、その際は、まだ傳説ではなく、土地の

者には實在の事に信じられてゐたのだつた。

現在の洗齊線江橋の近く、嫩江の河上を十餘丁行くと、堤上に今も一字の祠があるに違ひない。自分の訪ねたのは、十數年前だが當時さゝやかな堂が建つてゐて、小神廟なる額がかゝつて居た。その頃の黒龍江省督軍吳俊陞將軍は、何ういふいはれがあつてか、これを厚く信仰してゐたとも聞いて居た。恐らく、撫民工作の一手段であつたらう。

嫩江小神廟も、その祭日は、同じく陰曆六月六日であるが、相傳この祭りの行事は見られなかつた。村民の言ふを聞くに、毎歲祭りの當日は、齊々哈爾の督軍公署から、多くの役人や僧侶が出張して、嚴かに祭事を執り行ふことになつてゐるとの事である。そして此の祭日までは此邊一切鼈は禁漁で、これに危害を加へることは、固く戒められてゐた。嫩江は鼈の本場で、その棲息数はとても多い。それ故、これの増殖を計る目的でないのは知れてゐる、全くのところが小神の信仰からきた禁漁であるのらしい。

様子を聞くに、祭典の當日、豫て用意の數隻の船に、それぞれ儀装を施し、道僧鼓手を乗込ませて、樂の音唳々と河心へ漕ぎ出される。全部の船が流れの真中へ軸を揃へ、錨が投ぜられるとそれが合圖で、大呂を鳴らし、珠數を爪繰つて讀經がはじまる。

暫くしそれが終ると、前以て準備された、船中何斛かの飯米は、全員かゝつて一齊に河中に投じられる、途端に錨を引上げ、櫓柁を押切り、えいえい聲で、一散に漕戻る。この場合、決して後を顧みない。顧みることが、神慮に逆ふものらしい。

斯うした、郷土的色彩の濃い神事が、何時の頃から始つたものか知らないが、その様子から考へ、相當古い歴史をもつものらしく考へられる。

この際、船中から投入される飯米は、勿論鼈神へ供へられ、またその眷族共へ供養されるものであるが、果して鼈が、生き餌でない米飯を食ふものであるかどうかは疑はしい。それは兎に角、この年この日、肝腎の御本尊の鼈神は御不在とやらで、折角ながらその祭事は行はれなかつた。楽しみにしてゐただけに、筆者の失望は大きかつた。

何が故小神は不在であつたかと聞くと、此年夏の初めから、旱魃甚しく、さしもの大流嫩江も、それがため河水をいたく減じるに至つた。それで、鼈神も、どうやら定住の場所に棲んで居られなくなり、棲家を轉ずるの餘儀なきに立ちいたつた。村の者達の話によると、一夜鼈神は群をなす眷族共を引具し、闇に乗じて、遙かの上流へ避難したといふ。

その時の、大小鼈族の數は非常なもので、山のやうになつて引揚げていつたが、その爲め

牛船ウシフネと稱ふ幅廣の傳馬船は、彼等の通り道に在つたがため、無慘にも轉覆して終つた相だ。其後になつて、幾度か悪雨があり、河水も増して、以前の如く濠々たる大流と成つたを機に龍神は數多の同族を伴れて、なつかしの古巢に戻つて來たらしい。といふのは、その時、だいぶ澤山の龍を見、また釣あげもしたから、これ等はそれと一緒に戻つてきた眷族の一部だつたに違ひなからう。

土地の人々は、今年はそんな次第で、いまだに祭禮が済んでゐないのだから、六月八日を過ぎたとは言へ、まだ解禁してない譯だから、濫りに漁つては相ならぬ、と、おごそかな顔をしてゐた。

此處の部落民が、何故小神を信仰するかと云ふと、すべてが漁民だからで、河江の主、水界の王を守護神とするのであつた。それで一切これを漁らず、従つて料理に用ひることはない。しかし滿漢人の一部では、好んで龍を口にする風がある。支那料理でも、甲魚ビョウと言へば好い材料の一つで、紅燒カシ甲魚コウイシときては滅法美味い。奉天あたりの川魚屋の店先きには、いつも龍が置いてあるが、値段の方は日本に較べ遙かに安い。

或年の夏、東蒙からの歸途、洸兒河の上流へさしかゝつてくると、前方を一人の男が、笠を

背に負うてゆく。段々近づいて、よく見ると、それは笠ではなくて大きな龍だ。素晴らしいしろ物、今夜これで一盡いちじんゆくべく企らみ、賣らぬか、と交渉した。すると賣つてもよいと言ふ。何價だ。何價でもよいと言ふので、當時の奉票一圓を出して、これで何うだ、といった、「好こう」と一べんにきまつた。大儲けとばかり、急ぎ受取り、大車の後へ結びつけた。あとで馬夫はわらひ、「まづ三十錢が相場、五十錢ならいゝ旦那さ」とひやかした。

如水の老龍

龍には、いろんな異名がある。その多くは如何な理由か、擬人名であるのも訝かしい。河清使者とは「類書纂要」に見えるものだし、環甲尙書、甲折翁などは「水族加恩簿」に載せられ、折翁、裾欄大夫の二つは「事物紺珠」にあり、跛奴は「事物異名」に、河伯使者、綠衣郎は「名物法言」に見える。本項の題も最後のそれになつたのであるが、「事物異名」の跛奴をのぞく他は、皆立派な士大夫格な名である。爬蟲類の下族とはいへ、また人間にゆかりを持つものと見える。

後漢の頃、如水の流れに程近い、如南の城下に、怪しき妖魅が出沒して、時の人達を騒がし

た。
その者は、黄帛の帽を戴き、錦繡の縞ひある緑袍をまとひ、立派な輿に乗つて多数の騎を従へた。太守、俄かの巡問と思ふから、役人等は大いにうろたへ、城下の者共は土下座で敬意を拂つた。これが近頃では殆どいつものやうである。

が然し、不審な節々が少くない。領内巡視に先き立つては、いつも、前以てその事あるを觸れるが例だが、それが無い。のみならず、後で、その都度判明するのだが、太守にあつては事實、何處にも出かけぬ、と云ふのである。するとこれはまさしく贗者だ、といふことになつてきた。

これは、御かみの威光にかゝはる事である。捨て置き難しと、その正體を見届くべく、乗出したのは、費長房といふ役人だつた。

費長房はその頃、最も知られた、道術の大家である。役柄らは市掾といふから、町奉行みたいなものであつたらう。それ故に一層、太守を眞似る不届者を取締らなくてはならない譯でもある。それに彼は、道仙壺公に師事して、道術の奥義を究めてゐたから、心中期するものがあつたに違ひない。

或日の朝、費長房先生登臨すべく、城關にさしかゝると、天なる哉、その巡問の行列にぶつかつた。

費は駆けぬけて、行列のゆく手に立寄り、輿上の貴人を、はつたとばかり睨み据ゑた。すると如何に、太守の姿した者は、その勢ひに打たれてか、彼を正視できず、眼が急にくらめいて忽ち輿から、迂り落ちた。

地上に平伏して、只管助命を乞ふを見た費は、「汝は一體なに者なるか、夙く正體を現はせ」と鋭く一喝を與へると、こはそもいかに彼の貴人、全身に蒼黒の苔を被つた一個の老龜と成り果てた。

その大きいこと、恰も大なる車輪の如く、その首は數尺に及んだから、なみ居る人は、恐ぞ毛を振るつて驚きあきれた。

費はこれに、あらたかな靈符を打つて、兵に命じ如水の淵に投ぜしめた。

聖朝のこと、この老龜は、不氣味な蒼黄いろい腹を反へして、江岸の浪にただようて居た。この事あつて後、費長房は大いに名聲を博し、更に重く用ひられるに至つた。その靈符と稱するは、壺公から曾て授かつたもので、これに依つて太守極景の命を救ひ、また庶民を助けた事

もあつたが、その後いくばくもなく、此の靈符を失つてしまつた。すると今迄彼のために滅ぼされた鬼共が集つてきて、みるみる費を取り殺してしまつた衆鬼の中に、かの老僧の幽鬼の居たのは勿論であつたと云ふことである。

り 祭 ボ 才

才 祭 場



原 草 の 古 蒙

一望眼に遮るもの、ないと云はれる蒙古平野にも、自然はどこかに影をつくる。海拉爾の松山など、その一つ。山から続くなだらけ、放牛の聲もいとどかだ。

西口から斜面、南へ廻ると、所謂平野、小手をかざせば、呼倫貝爾の地平を劃する。こゝが南屯で、南屯と云へばオボ、それほど名高いオボがある。名高いほどあつて大きく立派で、あたりに開えたものである。

きらぎらと陽射しの光る午後、馬車を驅つて、名代の勝地松山から、その邊一帯かけめぐる。一千餘呎の高原には、もえ立つ緑、くさぐさの花が、さまざまな形と色とに野を飾る。

夏といつても、一日の氣候氣温は、野へ一步を出ると、朝と夕は春、晝は眞夏の陽光に照付けられるのだ。其のせい、草といふ草、花持たざるはなく、此地の七月、夏野は盛んな勢を示してゐる。

砂地には「砂地れんげ」が、紫を帯びた紅花をつどり、白いむく毛の葉や莖の間から若い實ものぞかせてゐる。この花は、秋立ちそめても、次ぎ次ぎと咲いて衰へず、咲いて終へたこすゑの先には、蒴皮莢の實をつける。風にゆがんだ松の根方や楡が影置く紫の砂面には、落ちた莢を弾かせて、その種子をちらばらせて居る。

黄金の色もて誇らかに咲く「きすげ」がある。これも強い野花で、秋逝くころまで、花輪は幾分小さくはなるが、咲きつゞけるものである。仲夏の炎天には、勢ひこんで咲きならぶ。

南滿では、灌木連翹と、春二番乗りを競ふ「おきなぐさ」すなはち白頭翁は、此處では初夏に咲く。薄むらさきの床しい花だが、今咲いてゐるのは残んの花である。普通のは既にその梢頭へ、白銀の毛を毛槍のやうに立て、その白頭を陽に綺羅美やかにひからせてゐる。

「桔梗」は蒙古の至るところにあり、何處のも極めて花が大きい、何ういふ加減か、こゝではそんなに大きくない。りんなりの水いろ、群をなさず、つゝましやかに揺れて居る。

群落をなすのは「芍薬」と、「薺草」。芍薬は白く清らかに、そして大輪、夜會服を着た貴婦人のやうに、三々伍々とおつまるが、興安嶺に見るやうな、大群落は爲さぬ。「薺草」の方は、芍薬ほど氣高くなく、安手に朱紅色にひらく、これは何十丁となく續いて群れる。

地に水潤の氣あるところへ出ると、「ねちあやめ」、漢名蘭草が、あちこちと大株をつくる。濃藍に尖がつた葉を、幾分か拗ねた形で敷詰たてて、紫の編蝠に似た花を舞はせる。それと「ほそばやなぎたで」は小さい水溜りのほとりだけに育ち、紅なす細い莖と同じ色の細い葉は、その散りこぼれた花屑と共に可憐でさへある。

かうした邊りには、また「吾亦紅」が特殊な枝ぶりとし、しぶい、そして寂しい色の實をつけてゐる。のこぎり形の葉が、しめつた砂地に腹這ひ、あちら向きの「とらの尾」に、話しかけてる風情を見る出す。

うすくれないの小花を夥しくつけた「蒙古はまさじ」がそこへに見える。この草をよく見ると、根部に匙形の葉が僅かあつて、細い草が簇生し、長けは五六寸から二尺餘に及ぶ。花は我が「はまさじ」と異り穂状をなさずに、小枝を岐つてそれに一杯花をつくる。花を能く観察すると、五角形の漏斗状で、同一集簇中にも、單に一個開くのと、一輪の花中から、更に黄色の筒状花を有つものとある。この花の特徴は、手折つてきてからも水に活けずとも、その儘籠へ投げ置いて、色香は少しも衰へない。乾燥してカサ／＼にはなるが、芝の色かたちは、磯邊に散るさくら貝のやうに、いつまでも美しい。漢人はこれを不死草ともいつてゐる。

「野菊」、「りんどう」、「女郎花」、「防風草」などもあり、「あさみ」が逞しい姿で濃緑色にはびこり、既に草の上に頭角をあらはしてゐる。あさみに似て葉莖も丈夫さうな、「ひこだい」が藍紫の手鞠のやうな花を、さしあげてゐる。

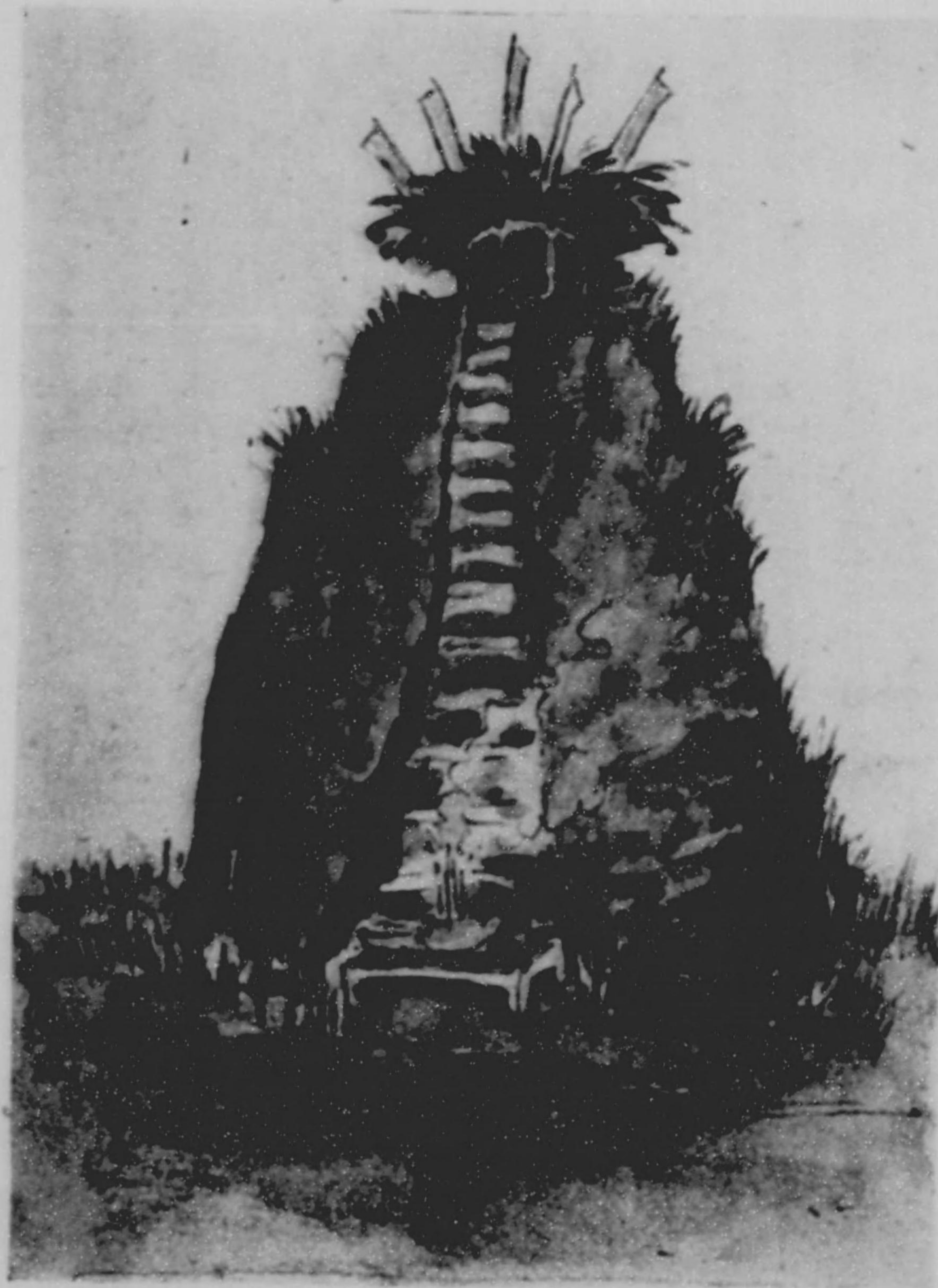
丘の帷が砂を斜めに崩れるところ、二個のウスギーグル（帳房）があり、タタールの皮革商

が、大きな煙管を咬みながら、蒙古人と牛皮の値段のことで、あげつらつてた。

この低い丘を下り少しすると、一面平らな草原で、またこゝにも、とりどりの草花が首をもたげてゐた、別けて「飛燕草」の翠が眼をたのしませ、「あぶら菊」が黄花を一杯に擴げて群生してゐる。山羊の聲、野蠅が顔にはげしくぶつかる。

南屯のオボが見えそめて、馬車は大分の時間を走つた。オボを目指してゆくのである。指にどに見えたオボが次第に太さを増し、段々と近づいてくる。近くなつて氣付くと、オボには、それを中心に大勢の人がむれて居る。青い、紅い、小旗などひら／＼し、大きい黄幡がはためていて、何か樂器の音などもきこえて来る。オボ祭りだ、とわかつた。

此のオボは、オボとしては立派なもの、基部で經四間半、高さは、先づ六間もあらうか、磚と土で積上げ、急な段々が不器用に刻んである。上部次第に狭く、徳利状、頂部六尺許りの所に本棚をかこみ、その中に楊柳の枝と五色の小旗が無數に差し込んである。またその棚から紐で三角の片々たるものが、いくつも結びさげてある。その一つを手にとつて、よく見ると、羊の肩胛骨で、横書きに西藏文字の經が書いてあつた。基部の正面に一個の大きい臺を据えて仍豆腐、仍菓子、淨水等が供へてある。その眞中に牛の首が、血をたらして据えてあつた。線香



南屯のオボ

の煙りのうすれる彼方から、眼玉が青く鮑貝のやうに光つてものすごい。その又下の方には、山羊だか、羊だかの丸茹でが四つ、長々と、これも供へてあるのである。

黄いろの立烏帽子を冠つた、年配の喇嘛が三人、おごそかな低音で經を誦し、あとの十名ばかりは、丸頭に巻法衣を被り、それぞれ手に樂器を持つて、樂を奏する。その中央に、疊一枚ほどの厚い朱色の毛氈の壇をかまへて、どつかと座する大漢がある。濃い藍色の絹に龍紋を刺繍し、裳裾には五色の波状紋を縫ひあらはした、謂ふ所の蟒服に、孔雀の尾羽を飾つた黄帽を戴き、見るからに重もくしい大官大禮のいでたちだ。手には大珠紅珊瑚の珠數を爪繰りながら、衆生ともども、「嗚呼蓮華の上」の意味をなす、「唵嘛呢叭味吽」を物靜かに唱へてゐる。當時の呼倫貝爾政廳長、齊普森額なのだった。

この者は、後年に及んで魔がさし、密謀をたくらむで、それが遂に發覺した。とらへられて同類數名と共に、銃殺に處せられたのだが、聞くところに依ると、刑兵の射た弾が命中したとたんに彼は、どうと地に倒れた。と、忽ち起上つて、不敵にも刑兵に對ひ、「確かり撃てツ」と怒號したさうである。そして第二弾を受けて息を絶したといふ。

この廳長の左右と、少し退がつて居ならぶのは、廳の重だつた役人と、旗王及び村長格の人

物である。この日を晴れと着飾つたか、皆これ等も美々しい禮装である。暫時奏樂と誦經が続いて、よき時分となつた時、祭主の廳長は、やをら立上り、洗米を盛つた鉢をオボへ捧げまわらせる。役人達もこれにならつて、傍らに用意の、乾肉の小片、仍菓子類を、恭しくそなへ拜を爲す。この時喇嘛は愈々聲を張り、鏡鉞や銅笙、太鼓の類を、一きわ早間に打鳴らす。これの酬となるに及んで、それまで草上に座して唱名をとなへて居た村人は、漸く立上ると、歡喜のさまを現し、舞ひ踊るの恰好でオボの周圍を廻りだす。これを機に祭主は、供へた洗米を再び手にとると、群衆を目がけて、ばらり／＼と投げつける。役人また乾肉の類をとつては投げ、とつては投げする。小供達は、急に列をはなれ、亂れ争つて拾ひとる。投げる肉や菓子に混つて、二三寸の紙片が、ひら／＼風に舞ふ。これが彼等の最も有難がる護符で、粗野な木版刷りによつて馬が現してある。此の護符を得れば、その年の馬疫を防ぎ、もろ／＼の鬼魔を除け得ると信ぜられて居る。

これで大體オボ祭りの式は終了したらしい。その後には、角力、弓技、競馬などがあるわけだが、この折りは都合でそれらは見ずに歸つた。大勢の參詣人の中に混つて一人舞髪を長く垂れた青衣の男が、オボに跪いて恭しく拜を爲したあとで、伴れてゐた三つばかりの幼い兒をさ



オボ祭りの護符

しまねき、同じ様に腹這ひになつて拜む禮をさせてゐたのは、なにがなし哀れなものをそゝられた。

○

オボは漢字で鄂博につくる。蒙古、西藏、新疆等に廣く分布を見る一つの神祠、また祭壇で形式には幾通りもあり、礫石を圓錐形に積上げ、また石と土、磚などで積んだものもある。その頂點には一本の木製品、これは槍とか矛とかを型どつたものだが、必ずこれが在つて、それを包み圍む恰好で柳條が無數に指してある。又オボの數は、一個單獨に立つもの、數個並列するもの、拾個以上もあるもの等、種々だが、多くは單に一基のみのものが普通である。これの所在地は、嶺の上、山の峠、分水嶺、湖邊、境界點、堂廟の附近、役所の圍り、また路傍にも築かれる。

今日では神の宿り以外、道標、境界標等の役目もなし、牧人旅行者の道しるべ、また目標にもなる。但しこれは、喇嘛教の所産とのみ思はれてゐるが、それよりも早い時代に生れてゐる。鄂博が北邊の胡族であつた匈奴や、鮮卑の間に存したことは明かで、「鮮卑の族、古くより秋天の祭を相傳へ、柳條を立て、衆騎馳逐すること三周、即ち止るはこれその遺法」と

「漢書」匈奴傳蹄林の註にある。

要するにオボは、古く通古斯系統^{ツングース}の民族間にあつて現れた天祀壇ではなかつたかと想はれるのである。後世、佛教や、西藏古代宗教のハヌ教、及び在來からの薩滿等の混合や影響で生れ出た喇嘛教が、それを繼承して來たのである。

蒙人の牧者や旅人達は、オボの傍らを通る時には、必ず附近から一個の石を拾ひ、積重なつてゐるその上に更にのせて、唱名をとながら、敬虔な態度で冥目合掌、拜をなす。一個の石を積み加へることによつて、悪事災難をのがれ、我身の罪障が消滅すると共に、また家畜が息災安全に成長するものと信じてゐる。

薩滿の祈禱

蒙古の宗教は、喇嘛教と一般に解釋されてゐるが、喇嘛教の歴史は淺い。印度のタントラ系一派が、西藏に入つて從來のボン教と合し、秘密佛教である喇嘛教が生れたが、そのボン教なるものは一種の薩滿教なのである。そして尙西藏には、印度佛教と合併しない同國古來のボン教なるものも遺つてゐる地方がある。

薩滿教は、最も古い亞細亞民族の宗教で、その分布は、西比利亞、滿蒙、土耳其、西藏、中央亞細亞の諸民族、朝鮮、アイヌ、エスキモー等に迄及び、古代日本もこの分布圏内に屬してゐた事は、専門學者の一樣に認める所である。

今日では、喇嘛教、佛教、道教、回教、耶蘇教等のために壓せられ、文化民族にはこれを信奉するものがなくなつたが、未だ滿洲民族、蒙古族間には相當の潛勢力を保持されてゐる。

薩滿とは、滿洲語で亢奮又は感激を意味し、同時に女巫の義であると解釋されてゐる。そして男巫も勿論あつて、祈禱、跳神、招魂、供養等を爲すが、その様式は地方に依つて幾分の相

違はある。薩滿の最も重要な仕事は、冥界と現世とをつなぐ事にある。即ち祈禱讀經中、自己暗示によつて、冥界の亡者の意志を傳へ、また神トろしによつて、神意を人間に知らせるのである。此點我が市巫に似通ふ。

また薩滿醫といふのがあつて、祈禱と、神の示しによる藥品を與へなぞして、病を治すことも又彼の天職である。東蒙奈曼旗を巡廻してゐる際、たまたま此の疾病救治の祈禱に接したので、その時のあらましを述べる。

夫れ、吾が薩滿の主神は、凌すべからざる、無量偉大の神靈にして、天上天下大世界を統治し、常に身體を俗界に現すなく、麾下百神を率ゐて、天上界に鎮座します。

麾下の百神と申すは、即ちヤインと唱へ奉る神々にして、日夜絶え間なく人間界を監視し善行陰徳の士に授福なすを勤めとなす。主神は一方、ヤスダイなる魔神を地下地獄界に養ひて、これまた幽明の兩界に眼を曝させ、邪行惡徳の輩を厳しく懲戒する。

その善神ヤインのまします天界を、バルランコルチャと稱し、中界即ち人間の住む地上世界を、オルトイトと云ふ。また下界無間を、チエルチャンチュチャと唱へて、これぞ魔神ヤスダイが、鋭爪を磨する地獄なり。人間ひとたび無情の風に誘はれ、幽明境を異にすれ

ば、生前の諸行、淨玻璃の鏡に照され、その善惡の陰影に依つて、かの者達の神靈は、或は上界にのぼり、以て蓮華燦々と降る淨土極樂の境に、安閑と生き榮えることあり。或は再び地上中界に生れかはり、前世と同一の世に生を営むことあり。或はまた、八大地獄に陥ちて、惡鬼羅刹が爪牙にさいなまれ、ありとあらゆる艱難に、奈落の辛楚を嘗めるに立至ることあらん。あな畏るべし慎むべし。吾等薩滿の師現は、常に主神に事へ、百神ヤインを神おろして善男善女を慶すべし。また時あつては魔神ヤスダイを拉し來つて、惡者外道を懲伏すること意の儘にして、掌を返すよりも尙易し。されば世に生を享くる、生きとし生くる者、別して人間にあつては、薩滿の教を信奉し、常々天界諸神の祭祀をおこたらず、たゞ何事も主神ヤスダイの加護を、謹み畏んで受くべし、云々。

大體右のやうな文句が、祈禱の序曲として、神現の口から發せられるといふから、その曰ふ所は、佛教の因果觀念とあまり違ふとがない。最も此の宗教も、長い年月の間には、隨分佛教思想や、回々教や、或は喇嘛教の教義の影響うけ、また感化されて來ないとは言ひ切れぬ。この事は更に、人文文化の交流が、かゝる原始的邊土に在つても、幾分なりと行はれてゐる證左でもある。

要するに、此宗教のもつ世界觀は、善惡二神の存在と、その二神の持つ技能の現れがそれで人間の靈魂に善惡兩面のあるのは、この二神の力が絶えず働きかけるためで、若し人間が善根を積んで惡神の力に對抗し得た際は、天上の樂土に行き得る譯である。そしてその世界の構造を見るに、天國は十七の層があり、下界(地下)に七乃至九層がある事に成つてゐる。人間の住む地上は、右兩者の中間で、これを中界と稱し、常に天界と下界の作用を享けるものだとしてある。

扱てそこで、この祈禱をあげる薩滿現の服飾だが、これも地方によつて可成りの相違がある。奉天吉林あたりでは、普通の服裝の上に袴を着け、五色の劍形の垂れを腰の周圍に垂らすだけにとゞまるが、蒙古陳巴爾呼の方へゆくと、圓形の銅鏡を八面も着け、奈曼旗地方のそれは、鏡は二面だけで、鍔の袖のやうに鐵片を綴つたものを、肩や腰に着ける。また駝鈴を腰に數個下げたのを見だこともあつた。

奈曼旗で見たそれは、狼皮で出來た胴服を着てゐた。この胴服には、鐵片が夥しく連続してあつた。袴には五彩を波狀に刺繡したものを用ひてゐたが、頗る時代のしる物で、ぼろぼろにほつれてゐた。胸から胴廻りへかけや、錆びた銅鏡をつらね、辮髪に鳥獸の彫刻のある兜(と

いつても甚だ幼稚な細工だが、それを越く。右手に鈴、この鈴は後に大形の團扇太鼓に代る。その太鼓の柄の下部には、經二寸程の鐵輪が數個附いてゐて、それを振る度に鈴に似た音を出した。背に大劍、歩く毎に憂々と響く軍鞋、いづれも古色を帯びて、蒼然たるものであつた。祈禱の式は、初手に天地東西、次で南北と拜跪三度を繰返すに始まる。やがて直立、手鼓——と云つてもこの太鼓は一枚の團扇太鼓で、經二尺位ある——を調子よく打鳴し、または滋く連打する。しばらくはこの太鼓の音のみが、廣々とした野面に擴つて、神秘的の氣もちを起さしめる。その内、不思議な音聲で、病魔退散の呪文なるものが唱へられ出すのであつた。

それは、仍餅子や仍酒の供へられた、祭壇に向つて爲すのだが、包ツボの前に仰臥する病人の方にも、時々思ひ出した様に顔を向けてやりもした。

その内神が乗りうつつたと見え、唱へる調子が違つてきた、家族の者はその時始めて、地にぬかづいて何度も何度も禮拜した。すると今度は、現は太鼓を叩き乍ら、また奇聲を發しつゝ、唱ひながら、足をあげ、身體をくねらせて踊るのであつた。その踊りたるや、蹠々跟々、いまにも溶け崩れん恰好で、あちらへよろり、こちらへよろり、立派やかな、且つかめしきいで立に似ず、これは又愚にもつかぬ態たらくである。

この動作と祈禱の言葉は、所謂下界の魔神を、無間地獄から呼び出し、患者の救命方を交渉してゐる様を現すのである、と、後で聞いたが、その時にはさつぱりわからなかつた。

と、見る間、俄然一躍地を蹴つて、跳び上ること數十度、右手の鈴を大地に抛ち、背の大劍に手がかゝるや、ギリリといきなり抜き放つた。

魔神との談判破裂、最早や祈禱や呪文はまだるしとあつて、最後の手段に及んだ譯である。さこそあれ、かれは大劍を眞向にし、また横さまに薙ぎたて薙ぎ立て、獅子奮迅に荒狂つた。跳躍、跳躍、また跳躍、阿修羅の如く大地を踏鳴し、天の一方を望んで、はつたと睨んだりした。その間、鏡ひし連鐵は鏗々と鳴り、八面の古鏡は、燦爛と陽光を射返した。師現薩摩の額は玉の汗、雫を爲してばただたと降り落ちた。

この力演が一通り終ると、今度は再びもとの、蹠々跟々に立返るのであるが、拔身の劍は、その時薩摩自身、垣根の下へ片附けた。それから二度目の太鼓は鳴らされ、鈴は振られる、前に言ひ落したが、薩摩の現は、一般からは薩摩と呼ばれてゐる。それは恰も喇嘛教の僧侶が、單に喇嘛と呼ばれると同じである。それからまた此際の薩摩は一人ではなく、ほかに助手のやうな、見習ひのやうな薩摩が二人附いて來てゐた。勿論この二人も太鼓を打ち、鈴を振り、ま

た経を誦するのである。

この楽器の音に伴れて、奇妙奇烈な聲調をなす唱歌と、酩酊亂醉者の如き、世にも不思議な蹠躑たる足取りとは、如何にしても不氣味極まるものであつた。この二度目に唄ふ歌の意は眞劍白刃を以て魔神を威嚇したが、彼の應じぬ所から、今度は天上の主神に縋り、其の守護を奏上する段を示すものなのである。

そして現は、自分の主神に訴ふる言葉と、主神のたまふ御宣託と、魔神が主神に對して言ふ釋明の言葉とを、その唱歌中で器用にも唄ひ分けるのである。それで、これが暫時つゞき、その後二度目の劍の舞が演ぜられる。

二度目の荒事は、主神のみことのりを受けたその現が、魔神の軍勢中に斬つて入る所作である。よつて前回に劣らぬ跳躍と、猛烈な斬込みが繰返されるが、さすがに疲れるとみえて音無しの構へといつた物腰で、患者の身邊に佇立し息を抜く、然うかと思ふと、今度は、急に閻王の如き形相と成つて、顔全體を口にし、カーッと、臍下丹田から絞りあげた大氣を、病人に向け吐きかける。

さうかうするうち遂に惡神外道は閉口し、無間地獄の底へ逃込んで終ふことになる。そこで

主神に御禮の經文を誦し、終つてあと祝ひの唱歌舞踊にとりかゝる。無論こゝにも、珍妙不可思議な唱歌はながながと唱和されるが、此時觀衆は華かに手拍子して、それに和し、感謝と感激の裡にすべてが終るのである。扱てこれで肝腎な病人は治るであらうか、と言へば、勿論治る事もあり治らぬ事もあるのだ。

大體薩摩を招く程であれば、これは必然重態であるに違ひない。一時は祈禱で俟方に赴くとしてもいづれは黄泉の客となる。かうした場合薩摩は言ふ、これ神意の然らしむる所で、天與の命數である。かゝる上は死後の冥福を祈り、魂魄をして天上界へ昇させるであらう。と、斯く言はれると、質朴な手合ゆゑ、易々とかれの言を信じ、重ねて供するに牛羊を贈り、故人の成佛を願ふ次第となる。

玄 陰 池

三伏の盛夏、而もその日盛りの、或一刻の時間と云ふものは、草木も眠ると言ふ眞夜中の、逆を示す刻限ではあるが、何か一種言ひ能はない異様な淋しさ、寂寞としたものを感じるものである。萬籟おのづから寂たるさまで、此世の終りかたさへ思はれるやうな不氣味さをさへ感ぜられるのも不思議である。それは逢魔ヶ時にも増して、それとは又別な、趣きの違ふ淋しさだ。假令、それが人寰滋き都會にあつても、それを感じない譯にいかない。その時分、大抵の人は午睡に夢を遂うてゐるし、極暑であれば道行く人も稀にしかない。路面は極度に熱せられ、屋根々々の莖は、干割れんばかりに乾いてゐる。追が出好きの子供等も、胡同よこまちの空地にも姿を見せない。

街を流す小商人、地方から出て来た絹紬賣けんちゆうなども、物の陰に荷を下ろして、一息入れて居るであらう。されば、世間は、まるで明るい丑滿時とも思はれる程、しんとして終ふのである。支那大陸中、随一の暑さは、廣東ださうである。屋根から雀が落ちたから、ふと拾うて見た

ら半分天日で焦げてゐた。咽喉が乾くので、畑の瓜を取つて喰つたら、口の端を火傷した、等々、白髪三千丈式の話も作られてゐる。廣東に、今はどうか知らないが、以前は、相當數にのぼる印度人貿易商が居たものだ。それが何んと、夏季には殆ど、郷里印度へ避暑するさうである。これは決して「話」ではないと云ふ。

北支での暑氣の王座は天津であらう、海や白河などの關係からか湿度は高く、餘計暑さを知る。それで夏になると、少し好いくらしの家では、家屋全部に、日覆ひを掛けるが、これがまた美事である。

滿洲では、すつと北に位する吉林が、祝融の本陣かと思はれるほど暑いのも不思議である。周圍に山が多く、丘嶺で圍んでゐるやうな按配だから、風が全く無い上に、城街に沿うて松花江が在るから、滿洲の諸地方に較べて湿度も高く、従つて暑いことになるらしい。

東蒙古入口の洮南、こゝが又暑い。平滑な沙漠地同様な砂地だから、輻射熱と相俟つて、盛夏の暑氣は想像以上だ。だが夕日も落ちて夜ともなれば、さすがは北國、涼氣とみに加はつて頗る心地よい。

奉天も、その盛夏、日盛りの一二時間は相當なものがある。洋車も、物賣りも、塙の蔭か、

柳樹の下に皆午睡の夢を逐うて動かうとしない。さきに言つた一種の憂愁、寂寞觀念に捉はれるのも、得てこんな時である。

その際、かの算命先生が、艶々しい竹の拍子木のとばを、カチ、カチ叩いてくるとしたら、一層寂々とした、妖氣に近い寂寞を知るかも知れない。窓から窓をつきぬける、大蜻蛉やんまの影にも、瞬間脅えを知るだらう。

それから、唄占ひの、盲目の笛吹きが吹く笛の音である。その手引きの子が打つ鉦の音である。笛は、孔の少い横笛で、決して餘韻嫋々の、哀れを誘ふやうな音色ではない。どつちかと言ふと、甲高な、そして餘韻を引かず、ピッ、ピッ、と吹切る、淋しき氣には薄い筈のものである。これが又なんとしてか、日盛りであるのによつて、うつろな寂しさを迫らせる。

丈け高く伸びた藍が、紅の可憐な花房を垂らしてゐるのは、美しい。低い家や、崩れた土墻の間に、あの卵形大ぶりの葉をかざし、強烈な日に照つけられて濃緑なその表には、埃が薄くたかつてゐる。そして暑さに疲れ、葉も花房も、ぐつたりとして動かない。さうしだ畑や空地のある裏街を、流してゆく盲人父子の姿は哀れである。三角の草帽、瘦せた長衣の肩には汗の痕が白くこわばつて、それにも薄黄ろく、埃りがたかつてゐる。笛の音と、合間々々に打つ鉦

の音を、草木もしぼむ、日盛りの或る一瞬に聴けば、それこそ、此世のものでなき者共が、ともにつれ立つて通り行くのではないかとさへ、思へてきて、怖しくさへなつてくる。

斯うした、白晝の寂々乎たる時刻を利用した、或る作者が昔の支那にあつて、一旅人が、不圖した油断から、魔に憑かれた怪話を作つた。この作話は、例の逢魔の時や、眞夜中の凄さ充分の時刻を脱して、態と眞晝間の淋しさを狙つたところに、却つて凄さや、妙味が出てゐる。

陽曲の商人嘶焔は、その頃、地方へ薬を背負ひ歩いて薬舗や醫者の家にそれを卸すのが商賣だつた。或年の夏、北國への途中娘子關を指して、重たい荷物を背負うて道中してゐた。

時しも例の日盛りで、その暑いこと、皮膚も爛れん許りであつた。大汗になつて、あへぎつゝやつてくると、いゝ按配に、道端に茂る大きな楊樹がある。これ幸と荷籠を下ろして、暫く木蔭に憩うてゐた。この邊りは、宿驛を放れた裏街道で、暑氣のせいもあり、行く手、越し方に往來もなく、鳥蟲の聲すら途絶えて、森閑としてゐた。

と、肩を叩く者がある。ツト見上げると、傍へに僧形の男が、一人立つてゐる。彼は暑さと疲れで、少しく假睡したらしい、急に汗がたらたらと流れた。

すると、その僧侶風の男は、重た氣な口で言ふ「この暑さに、此邊にひとり居る事は危い、忽ち暑氣に中てられて、霍亂かくらんするか、で、なければ、此儘乾し固まつて、木乃伊木のいにならうも知れぬ。愚老の居る支陰地の庵へ、いつて休まつしやれ」と親切に言うて呉れた。

嘶し焔も考へた。成程この暑さは尋常でない。木乃伊は、こんなことから、出来て了ふのか知れぬ、これはいけない、支陰池とやらへ行つて一と休ませて貰はう、と。荷を負ひ、僧侶の後へ従つた。

支陰池は思つたより遠くなかつた。藪者とした、森にかこまれた池の前へ出ると、そこはまるで夕方のやうに暗かつた。もはや先刻までの暑さは、拭うたやうに去り、風も無いのに、身裡は急に清々しい感じを覺へた。だが招じ入れられた、庵のいぶせきさまや、あたりの様子には何か陰々とした氣味の悪さがあつて、ひんやりと、地息ぢいきのやうなものが、背を傳うた。

それに、氣にする故か、何處と言ふわけもなく、薄うす腥なまこい氣が満ち、庵主の顔つき、物腰にも常人と聊か異なる何かがある。

軒端近く、池の面を望むと、今まで氣付かなかつたが、何時の間にか、大勢の小坊主共がやつて来てゐて、一同みな裸體になり、トボン トボン と水へ飛び込んで、涼しさうに泳ぎ

廻り戯れてゐる。中には荷葉はつぱの間から首だけ出して、ぼんやりこちらを眺めてゐるものもある。だが不思議と言へば、小坊主のどれもこれも、皆同じやうな、顔つきをしてゐるではないか。眼が圓く、鼻は甚だ低く、ほんの申譯けのやうに附いてゐるが、口だけは一文字に大きいのだ。然う思つて見ると、現在膝を交へて語るこの僧形の爺も、矢張り同じやうな相貌をしてゐる。父子かしら、それにしては、子の數が、あまりに多い。いろいろに考へ、また案じた。

さうかうする内、おつとめの時刻がきたとみえ、俄かに讀經が始まつた。いや、その聲の、喧しいのなんの、彼れは耳を塞がずに居れなかつた。

讀經が一とわたり濟むと、さきの野僧は、かれに水浴びを奨めた。もうすつかり暑氣も去つたあとだから、彼は躊躇するほかなかつた。しかしあまりに勤めるので、こばみ切れず、「では」と言つて池のほとりへ下り、靜かに水中へ、足さきを浸して吃驚りした。その水の冷たさ、骨身は凍つてばらばらに成つて了ふのではないかと、怪しまれるばかりであつた。水邊の蘆間に跼んでゐた、小坊主どもが、また楽し氣に、經を誦しはじめた。クヒ クヒ クヒと言つたやうに怪しく聽える讀經の聲は、實になんとも形容の出来ぬ、冷たく、ぬらつこい、嫌な響であつた。

最前の、柳樹の下でふと眼覺めた藥賣り嘶焮は、全身冷汗、脂の如きが、ぬらぬらに流れてゐた。悪感に顫へがとまらず、物を観、物を聞いても、さだかに判りかねる状態だつた。漸く起き上つた彼は、荷を引摺るやうにして、急いでその場をのがれ、やつと一軒の客棧やとやを探し出したとして、それから数日の間と云ふもの、枕もあげ得ず寝通した。

嘶焮が、いく分氣もちの快くなつたのを機に、宿を發つたのは商賣に先きを急ぐのと、滞在費の懐ろ勘定からだつた。病みあがり、重荷を負ふこの一人旅は、仲々に苦しく、道も思ふやうに捗らなかつた。暑い野道を休み／＼やつてくると、前にも後ろにも人影が絶え、暑氣は一層加つてきた。

すると何うだらう。遙か遠くの方から、蛙の鳴く音が聴えてきた。かの夢に見、夢に聴いた讀經の聲と、少しも變りのない聲だ。

はてな、と怪しみながらも、尙歩を續けて居ると、いつしか、來るともなく、あの悪夢に脅やかされた、玄陰池へ來て了つてゐるのだ。こりあしまつた、と感じた時、四圍まはらは急に黄昏のやうに暗くなつて、冷え冷えとしたものがあたりになぎつてきた。變に醒さいいな氣、夢の

時と變りがない。おやまた夢か、とも思つたが、否、然うでない、現實、たしかに現實であると感じた刹那彼の膝は、がくがく顫へ、氷塊を踏んだやうに、竦然として立すくんですつた。蛙の鳴聲は、雨のやうにしげく、段々早間にさへ成つてきて、かれの身邊をとりかこんだ。この時嘶焮、突差に期するものが心に泛んだ。急に荷を下ろすと、わななく手にそれを解き、あるだけの毒藥を、まさぐりまさぐり、池を目掛けては投げ込んだ。

この後、この地を通る旅人に、蛙の禍を蒙るものがなくなつたのである。

以上が、その話である。

鬼書

鬼書と、抽象的に書いては見たが、これは割記小説、謂ふ所の「志怪の書」に他ならない。聖賢孔子は、その著論語に「子、不語怪力亂神」と言つた。怪とは妖魅恠類の荒唐事であり力とは、大勇ならぬ暴虎憑河の小勇でないとしても、個人的俠勇劍争などは、この中に屬するのではないかと思ふ。亂は叛逆無道、佞邪姦人また盜賊の類である。神は、鬼神鬼魔の架空的迷信を謂ふのであらう。

しかし考へると、怪力亂神を戒めた孔聖の國にして、古くから、何と怪談鬼書の多いことか、多いから、従つて夙く先哲の戒める所となつたのだ、と解釋してもよろしからうほど夥しいのである。

それが筆記小説や、叢談、類書のたぐひならとにかく、歴史的記述であるべき文献類、たとへば、「春秋左氏傳」の如きですら、怪異は屢々現れてくる。

此種のもので、一番古いのは、記録ものとして「山海經」あたりではなからうか。確たる時

代は明かでないが、戰國以前のものに屬し、後世いろいろとこれに補筆改竄が行はれてきた。その海外、海内の二經は、當時實在すると考へられてゐた怪獸化鳥の説明である。但しこれは漢代の文人劉秀の追加したもので、更に晉の郭璞は、其の大藏經を補綴したと傳へられる。尙ほ同書の今日あるまでには、歴代の學人によつて、再々ならず補筆潤色が行はれたのは事實である。

前漢の文人、東方朔の作編と稱せられる「神異經」は魏晉南北朝頃のもので、それを價値づけるため、東方朔の名を冠したものである。晉の張華の註となつてゐるが、恐らくは張華あたりの作ではなからうか。晉以前のものとなると、時代があまりに古いので、堙滅したものが多く、後世幾度か、後人の手に集録された少數の物だけが傳へられてゐる。

唐代に及ぶと、時の宰相牛僧孺の著した「玄怪錄」十卷が有名である。それに次いで、此宰相の外孫に當る張讀なる人の撰「宣室志」が、更に名高い。其書は補遺共で十一卷あり、所載の多くは唐代の鬼談鬼語、不思議な物語で全巻を終始してゐる。當時世人またかゝる神靈妖魅を好み、ひろく普及して居たのである。その書名「宣室志」とは、漢の文帝が、最も鬼話を好んで、鬼神怪異を語つたが、常にこれを論じた室の名を用ひたのだと言はれる。

怪異を語る代表的文學は、東晉干寶の撰になる「搜神記」二十卷並びに陶淵相の「搜神後記」十卷であらう。然しこれも撰者の原本とは大分違つてゐようとの説である。後者の陶淵相の撰とあるのも、後人假託だとの説が濃い。次いで、唐の殷成式の「酉陽雜俎」正續三十卷で、前記二者と共に怪奇文學中の尤なるものであらう。

宋の徐鉉の「稽神錄」も、この種の妖奇を集めたもので名高い。また、叢書「太平廣記」が李昉其他の學者に依つて編述された。今日原本の墮滅した多數の書が、幸にも同書に取入れられて居たばかりに、傳へられたものが尠なからずある。その後、洪邁の「夷堅志」が出た。これは「太平廣記」を真似たものらしいが、四百二十卷の大著で、而もこの浩瀚の書が、洪邁一人の手によつて成つたと云ふから驚嘆する。だが遺憾乍ら今日傳へられるのは、明版五十卷に過ぎぬ。「夷堅志」ばかりでなく、隨唐以來隨分いろいろな、志怪書が出たのであらうが、途中で亡佚したものが、少くないと言はれてゐる。

元明時代には、羅漢中の「平妖傳」四卷二十回がある。これは宋代の王則の叛亂を骨としたもので、今日行はれるそれは、十八卷四十回、明末の文人龍子猶が、怪民の章を補つたものと傳へられる。龍子猶は本名馮夢龍、「新曲十種」の作で名高い。

嚴從簡の著「殊域周咨錄」二十四卷は、萬曆二年の題詞があるもので、明代に於ける外國の事情を敘したものである。その東夷編には、第二卷から第三卷に亘つて、我が日本のことが掲げられてゐる。第一卷は朝鮮で、琉球は第四卷になつてゐる。以下南蠻諸國、西戎、北狄と、大いに想像を逞しうしてあるが、これはなか／＼に面白く、一應は讀んでみてよい本である。「三才圖會」の一部には、同書を参考にしたものが尠くないのである。その他に例の施耐菴の「水滸傳」、羅佑の「剪燈新話」、李贄の「剪燈餘話」等の傑作が出た。「水滸傳」は、専ら實在的人物の宋江を中心とした豪傑物語で、「怪力亂神」の中に當嵌めるなら、力と亂とを兼ねたものである。餘の二書は、最も幽鬼を語るに努めてゐる。

王圻父子の撰編になつた「三才圖會」一百六卷は、萬曆中の所産だが、類書として最も勝れたものである。同書は初め王圻が編し、後その子の思義が續集したもので、天地人三才十四門に亘る事物を説明して居る。その集録した多數の圖譜は、諸書のそれを集めたものと言はれるが、その努力と根氣には驚くべきものがある。

清代は、康熙の六十一年、乾隆の六十年といふ、二大文運期に恵まれたのが、三百年の文化を培ひ、中期の爛熟、後期の頹廢の二期に於ても、異常の文化を経験し、文事は別して絢爛た

るものがあつた。

中でも蒲松齡の「聊齋志異」十六卷は、我が國にあつても知らぬ者が無い程、一般に記憶されてゐる。袁隨園の「子不語」正續三十四卷は、また著名な書であり、紀曉嵐の「閱微草堂筆記」は、更にも名高い。これは一千二百八十二種の説話を、二十四卷に収めたものであつた。

其他神仙狐鬼を語る叢談筆記の類は、枚舉に暇なしで、數々のそれがある。國は大なり、歴史は古し、人の數夥しく、また尠く、歴世興亡常なしだつたから、人々は思ひかけぬ事にのみ出會して來た。その上彼等はその國民性として異常な想像力を持つて居る。ことにその人々の中には文字の國に生れ乍ら文化的には全く原始的とも云ふべき生活をなして居るものがあり、神々が横行し諸靈のみちて居る世界に今なほ住んで居るのである。そしてその中のひらけた人々の中に、我等の想像が出來ぬ怪奇を想像して、それを作りあげるのは、この國の人が持つ特性であるに違ひない。その結果數々の鬼談が生れ、伸び傳はつたのである、北宋の蘇東坡は、文を講じた後で、必ず一席の鬼話を論じたとあるが、その氣持はわかる。

中華の怪話には、同じ荒唐無稽ながらも、一段の凄味があつて惻々として人に迫り、讀む者をして悚然たらしむるものがある。と同時に、一面頗る無邪氣で愛嬌に富み、なか／＼に明朗

なところもある。是れも國民性の然らしめる所以で、神韻渺渺たる幽明の天地にも、どこか間の抜けたところが在つて楽しいのであらう。

鬼三題

一、死 鬼

拾數年前、奉天に在つた話である。

山東省萊州から出てきた絹紬賣り、名は忘れたが、假りに李として置かう。

毎日重たい荷をかついで、城内、城外を羅籠賣りあるいたが、何ういふものか、根つから賣れない。絹紬織りは夏のものだ、それが秋風の立つ時分になつても、此んな調子では、少なからざる資を下ろした上に、旅費さへ出ないことにもなる。全くやり切れなく、氣も滅入るばかりであつた。然し故郷に空腹を抱へてゐる妻子のことを思ふと、奮勵一番、も一度頑張つて、何とか荷をこなさないでは居れなかつた。

そこで、今日は一つ方向を換へて、俗に鐵西と呼ばれる滿鐵線の西側の街、皇姑屯へ進出した。額を汗を拂ひ拂ひ、軒並みに觸れて歩くのであつた、が、不幸はこの小街にもつき、一

軒とて呼び込んで呉れない。安値でもいゝ、何とかして、たたいて了はうと、あせればあせる程、氣はいらつが、素見し手さへ出てこなかつた。

李は汗と埃りで薄黒くなつた顔を拭ひもせず、荷に凭れて考へこんでしまつた。其處は街から少し離れた、回々教徒の共同墓地だつた。疲れが出たか、つひ、うと／＼としたかと思ふと急に寒氣がして眼がさめた。その時も尙焦慮と不安が身から離れず、商賣の不振、郷里のことなどが、縮木のやうな力で、彼をなやました。

いつそ死んで了はうかしら、ふとそんな氣が腦裡をかすめた。然うだ死んで了はう、と今度ははつきりとした決心のやうなものが、身裡に浸みこんできた。さうなると、もう苦痛も惱みも拂ふやうに失せ去つて、氣がらく／＼としてきた。

それにしても何ういふ方法を執らう。鐵道がいゝか、渾河に身を投げようか、それとも洋火の玉を服まうか、と思ひまどつた。するとこの時、後ろに誰れか居るやうな氣配がした。思はず振向くと、痩せ衰へた五十許りの男が立つてゐる。

ぼろ／＼の垢染みた長衣を着て、月代はのび、油氣の失せた髻髪には、埃が白くつもつてゐた。伸びた疎らな髭、陷凹んで、光りのない眼には、汚く涙がよどんでゐる。その男が、用あ

り氣に、李の顔を凝つと見つめてゐたので、李は氣もちをたじろがした。

お前さん、何か用かね、となじるやうに訊き咎めた。がその老人は、何とも口を利かず、たゞ瘦細つた、爪の伸びた指を立て、空を指さすのであつた。三白眼の、牡蠣のやうな色した眼の方向を追ふと、そこには逞しい、一本の楡の枝が伸びてゐた。

おう、これだ。此枝で死なう、紐は帯でよい、間に合ふ。李は寧ろ欣然と、氣軽く帯を解き枝に打懸けた。そして踏臺になるものを物色した。男は更におとがひを突出して、彼の荷、絹軸の大包みを指した。成程、これがいい、あつらへ向きだ。と李はそれへ片足かけて、待てよと考へた。

こゝで首を絞つてしまへば、當然この品物は、誰れかに盗られてしまふ。それは詰らない。それよか捨値で賣るか、買手がなければ當補へ質入し、その金を妻子の許へ送つてやらう。それから此處へ来て死んでも遅くはない、と、流石は山東人で、死のいまはの際にも、錢金のことは忽せにしなかつた。彼は半死人のやうな氣もちと足取りで、地びたを吹く蒼い風に送られて墓地を出た。

踏倒し値段で賣れたのか、質に置いたものか、とにかく幾何かの爲替を組んで、萊州の自宅へ

送り、あたふたと元の共同墓地を眼ざしてやつて來た。踏切りを越えて、もう少しすれば墓地の見える所までくると、急に氣持が變つた。死にたくない、

あれほど、死をあこがれ、死ぬことに依つて氣持を安らかにしたのに、今となつて、俄かに死ぬのがいやになり、おそろしくさへ思へて來た。自分が死んだら、國にのこして來た女房子は一體どうなるか、想ふだにぞつとするのであつた。だけでも、足は情勢とでもいふのか自然と前の墓地へ運ばれて行つた。しかし彼の老人の姿は皆目見あたらなかつた。

だが、彼はそこで、實に魂消たものを見て了つた。あの楡の枝には、すでに一人の男が、ぶら下がつて居るではないか……。

二、鬼 婚

滿漢人の間では、今日でも男女許婚の風習が盛に行はれてゐる。それが當人達の意志に依つて結ばれるのは尠く、總てが親同士の意氣投合から、倅や娘の幼い内に取決められて終ふ。

是等が果して満足に育ち、立派に成長すれば事無しだが、中には然うもゆかず、どちらかど中途で夭折するものもあるであらうし、或は更に不幸にして、双方ともに早逝する場合もないと

は言へない。

親身にとつて、これ程情なく、遺憾なことはないであらう。死んだ者の上に寄せる憐愍の情は、筆紙不盡、せめては死靈同士に盃を交はさせ、あの世とやらで一緒に仲よく暮させたら、幾らか靈も安まるであらう、と云ふ温い親心から、二つの靈に婚を行はせる。謂ふ所の鬼婚である。

鬼婚はまた、冥土の契りである所から、別に冥婚、また冥配、幽婚、配骨などの名もある。

この風は随分古くから在つて、三國の頃既に記録を見る。その後も相當これが行はれたと見え唐代になつてから、その非禮を諭して禁止した。所で宋代に及ぶと、因果因縁を題材にした志怪の書などが流行り出した關係からか、この風習が大に行はれてきた。許婚の靈に對しては言はずもがな、未婚者の亡靈に對してもそれが爲され、同じく未婚の儘亡せた異性の精靈を配する、といふ風になつた。それを媒介する専門業者までが現れ、鬼媒人などと呼ばれて、結構商賣になつてゐたらしい。

未婚者の死靈に對しては、同じき亡者を伉儷に配さぬと、彌陀の淨土に在つても、結局往生を遂げ得で、宇宙へさまよひ出す。それ等は人間界に出沒して、氣に入つた健康な異性を物色

し、十萬億土へ誘ひ込む、とも云はれた。第一冥土に在つても一人では何かに不自由、淋しい限りであらうと云ふ因果觀と温情が、斯うした風習を生んだのである。時代が下つて明清に入つても、例の「剪燈新話」の「牡丹燈記」や何かの怪奇小説も、好んで是等に材を求め、凄愴な怪を語つてゐるのである。かゝる稗史小説、また戯曲によつて、益々右様の思想を濃厚にしたことは明かで、今日でも地方によると固く信じられ、鬼婚の風も後を断たない。

鬼婚の儀は、兩親や親類縁者の間に意見が決ると、媒介者を立て、先方のそれへ申込む。双方ともに良縁とあつて話が纏れば、次で方士を招いて占はせ、それで日取りが決定する。但しこの日取りは、吉日ながら、式典を擧げる日ではない。して先づ僧侶を聘して、焼紙香華を手向け讀經供養を行ふ。その上で土墳の頂きに一個の穴を穿ち、それへ鬼頭子イノカシと稱する細枝の先きに紙製の珠玉をつけたもの、又はその家により紅い色の紙の小旗を差す。それが風にゆらげば、地下の靈が承認したわけで、若し何時まで経つても微動だにせぬとなると、この婚儀に對し、佛は不承知なのだとされ、取りやめとなる。しかし長い時間待つて居れば、いつかは動くに違ひないし、四季共に風の強い土地ゆゑに然うした事は減多ない。この事は双方の親達が別個に行るわけであるが、佛同士許婚者である場合はこれの必要がないこと勿論である。

どちらの土墳の小旗もはためき、鬼頭子も踊るとすれば、男女いづれの靈も大乘氣であるわけゆゑ、更に供養の數々を行ひ、紙錢を撒いて、地下二つの靈と、兩家のため慶びの言葉を交はし、奠酒をあげる。更に數日中方士に筮を頼んで式日を選び婚儀を行ふわけだが、その前に結納の取交はせのあることも、本式通りである。

當日は、双方の墓を發いて、白骨を取出す。嫁娶りならば、娘の骨を婿の墓側に運び、紅華、爆竹を打あげる等普通の婚儀に變らない。式が目出度く終了すると、兩方の骨を、壺または印合イシカウと稱する箱に入れた壺、一つ墓中に埋葬する。土を掛け終ると、茲で讀經と焼紙があつて、線香がたむけられ、吉凶慶愁の行事が一べんになされる觀を受ける。然しこれはどこまでも慶事であつて、骨を寄せるにも紅色の手套を用ひ、供へ物にも紅色の品が多い。男女二體の骨を娶はせ、且つ同時同所へ合葬するため、別に配骨の名があるわけだが、普通嫁取りには大凡季節といふものがあると同イ、鬼婚配骨にもそれがある。一般佛事や供養を行ふ季節が用ひられて、春、清明節の前後に多い。だがこの事も時代と共に尠くなり、都會や、それに近い所では行らなくなつた。

三、張家の鬼

支那に三多といふ語がある。多壽、多福、多男、の三つを謂ふので、一に壽命の長きを望み、二に富の増加を喜び、三には我子に男子の多きを希ふ。位や名譽や權力は、次ぎの次ぎであるらしい。多妻また然るか、何うか。

男子の多いを理想とする反面を窺ふと、女兒を欲しなく、望まないものである。これは古來の家族制度にもあることだが、彼等の經濟觀念から生じたものであるとされてる。幼少から少なからざる金をかけて、育てあげ、その上に莫大な費用をつけて他家へ嫁させる、とあつては甚だ不經濟と言はなければならぬ。その上に、婚家先きの批評や不平に甘んじ、場合に依つては年々生活の補助費まで貢がせられる。成程これではやり切れなからう。それで女の子の産れるのを忌む風がある。多男を幸福とされるからには、多女はその反對の不幸にあたることになるからである。

それで、女兒の多數出生を厭うた結果、生れて間もない嬰子を、人知れず亡き者として終ふ蠻的悪行がなされた。その多くは南方支那であつたが、又他地方にもなくはなかつた。女兒を

多く持つ者、また貧困者の間に、さまで悪徳とも感ぜられず、犯罪とも思はれず、昔からの風習かのやうに、半ば平氣で行はれてきた。

その方法は、家の中で行水盥のやうな、水盆を利用するのと、河や海に投じて、溺死せしめるのとあつて、これを溺女、また溺子と言はれた。

溺女の文献的記録として遺るものは、古くは「韓非子」から、蘇東坡の「文集事略」にあり南宋洪邁の撰になる「夷堅志」、清代では、汪森の「粵西叢載」にもおせてあるからに、これは近世まで行はれて来たことである。政府もこの悪習惨行を矯正せんとして、同善堂式の子棄場育嬰堂を建てたり、保嬰會を組織したりした。有名な學子倉もこれがために出来たのである。それで何うやら溺女の風は多分に少くなつた。しかし全くあとを絶つたのではなかつた。

溺子には、女兒ばかりとは限らなかつた。男の子でも、重病で恢復覺東ないもの、生來病弱なもの、悪疫、不具者等には、同じくそれを敢てしたらしい。

陝州の富豪張珠の息子は、性痴愚でその上口がきけない、即ち啞者であつた。そして更に又手足も尋常でなく、曲つた儘で用をなさない。そんなで居ながら、食慾は旺盛、日夜飽食して飽くことがない、といふ厄介者であつた。さうした出来損ひに拘らず、張家では皆彼を可愛が

り、殊に珠夫妻はこよなきものと寵愛した。ありとあらゆる醫藥をも、それがためには厭ひなく微し試みはしたが、治りよう筈がない。資産の大半は既にそれに費されて、この調子であると數年したら、さしもの身代も潰れて終ふと云ふところにまで来てゐた。

或日の事、この地へ、或る道家で、醫をよくする、阿走師といふ一老師が巡歴の途中立寄つた。それを聞いて張珠夫婦はよき機りゆゑ早速禮を厚うして、老師を招き診を請うた。

老師の曰ふには、之れはこの家の主人に、前世の宿念で、罪業滅せぬものがあり、免れ難い業報である。それに依つて、五體不具、且つ愚鈍にして啞聾の子が生れ、汝一家に禍するのであるが、この本人は、實は人間でなく、人間の姿形を粧うた、物の怪である。此際恩愛のきづなを断ち、王土の外へ追放するがよい、と説き聞かせた。

そこで珠は、黄河の堤で齋會を開き、手厚い施餼鬼を營んだ上、冥目暫時、因果を諭して彼の不肖兒を河中深く投じたのであつた。

やゝしばし姿を水中に没して、見えなくなつた息子は、やがて數十歩の下流に、ひよつこりと頭を現した。そして舟に乗つてゐる父母を指して、にやりと笑ひ、そこで初めて口を利いたのである。

啞者であるべき筈の、その子の曰ふには、汝等夫婦と我とは、因縁淺からぬ宿世よりの仇がたきである。今日この聖者に依つて、遽に罪障を解かれ、冥土の暗に消失せなければならぬ無念至極の次第、未だ惡報の終る時ではないのだが、これにて成佛遂げる他はない、と、いかにも口惜しさうに、叫び浪間に消えていつて終つた。

前の満女の惡習と、この張家不肖子の鬼話には、因果應報的の因縁ばなしが、一脈として自ら通じ居るやうな氣がする。恰度我が昔にあつた、女醫白牡丹が、數多の胎兒を、暗から暗に葬つた果て、その報ひとして夜な夜な蓮の葉を頭に被つた嬰子のために苦しめられる、あの話にも似た所があつて、氣味のよいものではない。

神 六 題

一、博 奕 神

東晋の征西大將軍として、武威を中外に輝かした桓温も、若年の折りは諸國を放浪して、一時は博徒の仲間にも入り、随分苦勞をしたものらしい。或時すっかり奪られて、二進とも三進ともいなくなつた。空腹を抱へ、寒さに顫へて友人の許へ轉がり込み、そして救ひを求めたことである。

友人の耽は、服を代へ、帽を取り換へ巧みに變裝して、桓温がすつてんにされた博奕場を訪ねた。

耽が張ると、必ず言ふ目が出る。幾度繰返しても、同じく彼れの言ふ目が出て、忽ちの内に大儲けをし、戻つて桓温に残らず興へた。

耽はいまだ年若く、世間を知らぬ年頃であるに拘らず、智能大いに勝れてゐたので、人は皆

彼を畏れた。殊に博才は神に達してゐたので、彼と勝負を争ふ不利を誰れも知つてゐたからかく姿を變へて出かけたものと見える。その後耽は有能な奇才を認められて、官に就くことになつた。後いくばくもなく、歴陽の太守に封ぜられた。

成帝の咸康初年、石季龍といふ流賊討伐のことで失脚し、間もなく又舊の地位に復したが、二十五歳で病歿した。この耽こそは、姓を袁といひ、その耽は名で、字を彦道と稱し、後世渡世人の間で、盆産の上の神と崇められた袁彦道その人であつた。今日博奕の事を袁彦道と稱してゐるのは、この者の姓と字をそつくり持つてきた者である故、これを袁玄道と書くは誤りだとある。

一、盗 神

盗神は、云ふ迄もなく泥棒の神で、甚だ穢かならぬことであるが、中華にはこの神がいくらかもある。神廟も出来てゐるから、流石は大國で、物にこだはらぬ所がうれしい。

別章「萬人坎」の中でも姜姓五虎神のことを書いたが、これは明末清初であつた。それとは別で、南北朝の頃の盜賊に、矢張り五人の強^{した}者が居た。それは、杜平、李思、任安、孫立、

鐘和の五人であつたが、これは兇賊には違ひなくも、一面義を知る俠勇であつた。

前廢帝の時といふから、景平元年であるが、これ等の賊があまりの横道振りに、逆鱗した帝は、將軍張洪に令して討伐を行はしめた。そして漸くこの五人の賊魁を殲滅せしめたが、これ程の豪賊故、死後にあつても此世を無事では過させない。さまざまの形に於て崇りを爲した。即ち疫癘を流行させ、暴風雨を起し、水害、蝗害等を續けざまに來さしめたので、遂に致しかたなく、五盜將軍となづけて神に祀つた。これが後世流行神となつて、諸國に遷座されるに至つた。

五盜將軍のほかに、五道將軍と稱する盜神もある。しかしこの方のいはれは傳はつてゐないので、或は五盜が五道に訛つたか、また盜といふ字を憚つて道と殊更直したものかも知れない。これよりも古く、春秋魯の人で柳跖は、かの僖公に仕へて高德君子人を以て聞えた柳下惠の實の弟であつたが、兄とはまるで反對な氣質であつて、盜賊を職としてゐた。これが又、罪に服して後神位を與へられて祀られてゐる。それから中華三大小説中の「水滸傳」の中に出てくる大立者宋江は、實在の人物とされてゐて、これが同じく賊であつた。そしてこれを祭祀した宋江廟といふのが在る。無論盜人廟である。

次に、これも宋代の實在的人物で、白勝といふ盜賊があつた。これと兄弟分のちぎりを結んだのが時遷といふ賊魁である。盜才に於ては白勝勝れ、盜術に於ては時遷がまさつて居た。この二人は、共に宋江の麾下であつて、宋の兩腕と稱され、大いに活躍したらしく、杭州に在る時遷廟は、今日でも却々に流行つてゐる。

是等の賊共は、いづれも義に依つて盜を爲し、その得た物を正しくして貧に恵んだ。いくら盜神であるとは云へ、破屣恥漢では神にはなれぬ。

それで、斯かる盜神の御神體は、如何な風に造られてゐるかといふに、五虎神や五盜將軍はいまだ拜さないので知らないが、宋江などは、立派な位冠東帯で、錦袍の袖から笏を構へて悠然と榻に倚つてゐる。慈眼豐頬、紫髯を垂れた、威あつて猛けからざる溫容は、どうして高德いやまさる聖王で、どこから見ても泥棒とは思へない。

白勝の像はまだ見てゐないが、時遷の像となると時に見受けることがある。但し廟内に鎮座するのはいまだ知らない。自分の見るのは、小盜見市場などへ時折り出る、三寸かそこの小形の像である。

この時遷の像といふのは、頗る振つたもので一個の臺上に、逆立ちに成つてゐる木彫像が多



盜 神 像

い。大抵は上衣を脱いだ半裸であつて、中には鑄造のものもあるが、上手な作はまづ無い。両手を地につき、兩足を空に向けて銃鋒立をしてゐる。此事に就きいかなければ在るかといふに、元來盗みの業は、まつとうな商賣ではなく常人とは反對な立場にある仕事なのだから従つて神體も逆に成つてゐるのだとある。

それと、また別に説がある。賊が目的の家に忍込む際、いくら竊かに盗むとしても、先方が遊侠の士で、その道の達人であつたなら、忽ち足音を聴き出され、喝破されて終ふ。ところが道を以てすれば、達人と雖も、案外耳目をくらます事が出来る。その覺られずに済ませるには足で歩まずに、手で歩いて行けばよい。これだと絶対に足音はたゝない。と云ふのだが、成程足音はしなからう。

扱てこれを何處へお祭り申すかと云ふに、斯うした小像だから、祠堂や廟へ安置することはない。けれどこれを自宅の神棚へ上げて置くのは憚りがある。そこで考へた末、屋内の天井裏のたる木と、それを受ける横木の間にそつとつけて置く、梁上の君子とは將にこれを言ふのだらう。盜業に出かける際は、香を焚き神酒を供へ、うやうやしく跪坐禮拜するさうだ。然し是れはあくまで竊盜の守護神であるらしく、馬賊のやうな荒仕事をする者達には、また信仰は別

にあつて、この神々を祀らない。

盜神を祭祀し、信仰をする者は、盜賊ばかりかといふと、必ずしも然らばかりでない。普通人も温厚な徳人も、また是れを尊敬する。で、それ等の人達も同じく盜を働くのかといふと、尙更ら然うではない。盜神は、惡徳者から福を盗んで来て、盜神を信仰する善男善女に、その盗んだ福を授けて下さるのである。何と有難い神様ではないか。

それからまだ他に御利益がある。それは走り人の足止め、これは奇妙に靈驗があると云ふ。それと失せ物の出ることが妙、盜難物の發見が更に至妙。犯人も旬日の内に擧がらせうぞ、といふ。愈々大陸は平安の象をとどめて長閑である。

三、杏 神

彼の軍學兵法の大家として有名な、孫子數世の孫に、孫臏といふ一人の秀才があつて、同じくお家の藝の兵學を魏の國に在つて學んだ。同窓に龐涓といふ他に一人の秀才があつて、共に學を勵んだが、龐は孫に及ばぬことを知つた。是が抑々孫臏二人の確執の始まりだつた。

當時、龐は魏の惠王に事へてゐたので、孫が惠王に見出されるのを恐れ、先手に出て惠王に

讒した。恐らく叛逆を策動してゐるとでも奏したのであらう。孫は忽ち捕へられて、逆徒に對する刑が與へられた。その刑とは、無慘にも兩足を切断する酷刑だつた。その上額に黥を入れ、愈々王に面謁せしめ得ぬやうにして終つた。この兩足を切断する刑を、當時臙と稱したので後ち孫を呼ぶに孫臙の稱を以てしたと云ふ。故に臙は本當の名ではなく、名は別にあつたのであらうが、傳はつてゐない。この時偶々、齊國の使者が來てゐて、これを聞き、深く同情して孫を齊へ伴れて歸つた。

齊の大將田忌は孫臙を優遇し、威王の兵學の師に推選した。

その後、魏は趙國を伐ち、趙は敗れて、齊に救ひを求めた。威王俠氣あり、趙の乞ひを容れて、大將田忌を指揮官とし、孫臙を軍師として魏軍を遼撃した。勿論魏の軍師は孫を讒した、曾ての同窓彼の龐涓であつた。孫臙は輜重車上にあつて計謀を策し、遂に魏軍を桂陵に粉碎したがまだこれだけでは、孫の鬱憤は晴れなかつた。

其の後、十五年といふもの双方に事なく月日は流れた。この年月の中に、魏と趙とはいづか親善が結ばれ、兩國聯合して韓國を討つに至つた。韓は兩國の敵ではなく、大敗して齊に助力を求めてきた。齊將田忌と軍師孫臙は再び魏を對手に戦ふことに成つた。此時の魏軍の總帥は

彼の龐涓であつた事も、また因縁と云はなければならぬ。互に智囊を絞り、計謀を練りに練つた最も大事な戦ひだつた。

一旦齊國へ攻め入つた魏軍は、期する所あつて兵を撤退した。この機に齊軍は彼を追うて、魏國へ侵入したが、魏軍の進出に會うて兵を返した。兵衛軍法の大家同士の戦さ故、一進一退さすがに微妙を極めたものだつた。

齊軍は、魏軍の前進には一戦も交へず、直ぐ退却に轉じたが、遠くは逃れず、馬陵の嶮にとどまつて兵を伏せた。魏軍は追撃に念で、歩兵をいつか後に殘し、輕騎のみ駿足を驅つて押して來た。馬陵の嶮まで來ると、路傍の大樹を削つて、何やら書いてある。大將龐涓怪んで、炬火を取寄せ、その光りにすかして見ると、驚いた。「魏將龐涓此樹下に死す」とある。

「書いたりの、おのれ痴れ者」と、怒り心頭に徹した時、齊の弓箭は一度に飛び來つた。隊伍大いに亂れ、混亂名狀すべくもなく、茲に魏軍は慘敗地にまみれてしまつた。大將龐、深傷を負ひ、且つ馬を失ひ、今は敵手に捉へられて、恥を末代に曝す破目に陥ちた。さすがは龐涓、双手に劍を把り、その大樹の下に座して、記録の通り自願し果てた。

この戦國に大勝した齊軍の功は、言はずと、孫臙の戦功である。彼は此時より、更に兵家と

しての名を著し、世々その兵法を傳へるに至つたは、武人最大の名譽であらう。彼は兩足が無いのだから、乗馬はかなはなかつた。戰場にあつては、いつも輜重車に座乗して居たらしいが、敵城を攻陥して、いざ入城式となつても、また輝かしき凱旋の行進にあつたつても、あまり熾爽とした存在ではなかつたやうだ。

所が後世、この兩足の無い彼を、孫臏眞人と稱して祀り、戰神に崇めてゐるのが、街の香屋である。世に武人の神はいくつもある。關帝、岳飛、秦瓊、敬徳、神荼、鬱壘、等々皆武人である。而もその中を選りに選つて、足の無い武人を守護神にするのが香屋さんだとあつては、少々皮肉のやうにも聞えるが、然うでない。殊更らに孫臏を選んだところに、彼等の好意と同情があり、そして其處には一片の慈さへないのである。これが反對に、章魚たこや百足むさしをそれとしたり、縁起棚に据ゑて置くやうだつたら、それこそ興醒めだが、幸ひ大陸人には、さうした變な癖がないので好い。

四、城 隍 神

河南滑州の知縣の章は、一日城樓に登つて四邊の風色に接してゐると、折から、忽然として

一異常な人物が現れ、知縣に對し、うやうやしく拜をなした。

見ると、紫袍に金冠を戴き、威容おのづから備はる貴人だが、その身體は實に小さく、二三尺に過ぎない。こはただものに非ず、と直感した章は、襟を正して、丁寧な禮を返した。

彼の貴人は、自ら名乗る所によると、滑州城々内に祀られてゐる城隍神で、人間ではなかつた。

城隍神は、これ迄に、たび／＼黄河の水神から難題を持ちかけられてゐた。

即ち黄河の水神は、黄河の流れを、より好く盛にせんと考へから、河の曲りを正し、河水をして、滔々真直ぐに流さすべく計畫した。しかし然うするには、滑州城をして河心とするのほかに手はない。それで城隍神に交渉を重ね、無理と承認さすべく、威禁にさへ及んできたのであつた。

城隍神は、城の守護神とあがめられてゐる身にして、その滑州城をむさむさと黄河の濁流に委せる譯にいかない。この談判は、當然決裂であつた。その結果、城隍神は、悲壯な決意のもとに、黄河の水軍を邀撃しなければならぬ事となつたが、それには到底兵力が足りない。そこで知縣の章に頼つて、援けを請ふ次第であつた。「その決戦の際、城壁に兵を配し、一齊に水

軍目掛けて矢弾を浴びせて頂きたい」といふのである。

やがて、その日はやつてきた。空あひは俄かに打つて變つて暗くなり、忽ちにして閃電雷雨轟々たるのすさまじさとなつた。すると不思議、河中から、白い一條の妖氣立のぼると見る間に、その妖氣は瞬間一大巨柱と化して、左右にゆらぎ、天地もつらぬかん勢ひを示した。

この時速し、かの時遅し、城隍廟本殿のあたりと覺しき邊から、一道の青氣中天に出現して河上に進み、かの白氣の光りにいどみかゝつた。そして暫が間、互にもつれ、或は離れまた追ひ、追はれして戦かつた。

それを望み見た章知縣は、時は今なんめりと、待機二千の兵に下知、河上の白氣に向つて雷雨の如く矢を射かけさせた。

これに辟易したもののか、白い妖氣は、次第々々に勢ひ弱り、遂々香煙の如くに、ほそくとなつて消えてしまつた。

風雨おさまつて、空は拭うた如く晴れ渡り、夕陽は明るく輝いた。この時、漸く我に返つた章知縣は、再び驚異の聲をあげない譯にかなかつた。

黄河は、その滔々た 濁流を、元よりは遙かの遠くの方へ移してゐたのである。

五、紫 姑 神——掃晴娘

昔、其は南北朝頃の事だつたといふ。子胥なる人の家に紫といふ一人の美しい婢が居た。固家柄の娘であつたが、戦禍に會うて一家離散し、據所なく同家の下婢に雇はれたのであつた。

子胥これを受し、後取立て、妾としたが、女君おんなぎみ曹氏の嫉むこと甚しく、型通り虐待した。だが紫は、心ばへまことに良く、殊に曹氏の命は、何事によらず快く服従した。しかし本妻にして見ると、これがまた氣に入らない。事々に當り散らし、罵言を浴びせた。その上にいつも不潔な仕事を與へ、圃の掃除なども紫にさせてゐた。

或年正月上元の夜、家の者は、皆樂し氣に打揃うて城街の賑ひを見に出かけたが、紫は相不變守留守番に、ひとり淋しく取りのこされた。夜更けて家人が戻つて見ると、紫は自分の室で自殺してゐた。

常々彼女に同情を寄せて居た世間の人は、これを知つて氣の毒に思ひ、紙で紫女の姿を作つて奠酒をさしげ供養した。

以後毎年、上元の夜にこれを記つて、圃の神とし、圃を不潔にすると、紫姑神の罰が當ると

言うて清潔にするやうになつた。また當日は、これに神酒を供へてから、呪禁をする。「子香は居らぬ、青姑も居らぬ、紫姑も出て見よ」と何回か唱へて、紙の神像を手にとると、神が若し乗りうつて居れば重く、さうでなければ軽い。重いと感じたなら、種々の事を心に念じて占ふと、吉ならばその者の顔がほてり、凶の場合は睡くなるといふ。

「靈應録」に據ると、紫姑はその姓を黄といつたらしい。秦州の王なる人は、常に圃の清潔に心掛け、紫姑神を祭つて居た。或時のこと、圃の掃除を済ませてから例の如く果餅を供へ禮拜をすると、黄女子即ち紫姑が現れた。そして曰ふには、「汝、われを祀ること年あり、その志にめで、吉事を授ける」との言葉、愈々恐懼して居ると、更に曰ふ「汝は蟻族の言葉を知るや」と。王考へるに、昔から蟻に言語あり、而も人間のそれと同じと聞くが、然しこれを耳にするは不能であるので、その由を答へると、女神は懐中から一個の玉匣を出だし、王の耳朵へ一抹の神藥を塗布して呉れた。そして曰ふには、「これにて何等かを得る所あるべし」と。

不思議なことがあるものかかと、翌日庭に下りたち、考へてみると、不圖眼にとまつたのは足許の蟻である。蟻は一と群れになつて、氣のせい何か何か議してゐるやうでもある。物は試すと、早速地に耳を寄せて窺ふと、一匹の蟻の曰ふ、「此處は冷えく」として寒いから、巢を他

へ移さう」また他の一匹の曰ふ、「此處の寒いのは巢の下に糞が埋つてゐるからだ、他へ移轉することに同意する」といふ聲が、確かに聴きとれた。

蟻どもが、巢を移すのを待ち、その所を掘つて見た所、果せるかな、十錠の銀が現れて、彼は急に分限者となつたと云ふ。

雨神とは關係ないが紙で作つた人形の神に、掃晴娘といふ娘のそれがある。

毎年夏の雨季にはいと、毎日長雨がびしょ／＼降る。物みな濕氣を帯び、砌(敷石)の隙間の草が伸び、菌も生えよう。第一仕事に出られず、その内に水でも出るやうになつたら大變だ。何とかして雨雲を拂ひ、晴々とした空と、日の光りを迎へたいものだ。と誰れしも希ふ所だが、扱て晴れるどころか、毎日雨は軒を打つ。

さうなると、人力人爲では到底出来ぬ、神の力に頼る他ないとあつて、紙で人がたを作りこれを軒端に吊すが、右手に一本の符マタを持たせるを忘れてはならぬ。勿論符も紙製だ。

この人形は娘であるから、額に火熾子ヒカシと稱する、紅の一點を打ち、なかなか可憐である。彼女は、その符で雨雲を掃き拂ひ、明るい天日を迎へるのである。これが所謂の掃晴娘で、

晴れれば貧酒をささげ、供物をそなへてお祭り申す。神とあがめるほど窮屈さはないが、我の照る／＼坊主よりは、神らしい。

點滴沈沈撲戸頻

青青染砌草如茵

連朝霖雨懸新霽

屋下斜懸紙偶人

六、旱 魃 神

ひでりのことを旱魃といふが、古くは然うでなかつた。ひでりならば旱だけで好い譯で、魃と云ふのは、ひでり神の名である。

魃を一名旱母と稱へ、また書に依つては、旱魃ともいつてゐるから、旱魃はひでりの神様の名となる。

ひでり神の魃は、もとより鬼神の類で、その形は人面にして獸身、且つ一手一足である。そして其の姿は小さくて、わづか二三尺しかないが、全身には恐しく毛が生え、常に裸形である

らしい。眼は、眼のある所には無く、腦天に、かつと開いてゐる。これでは、よく足許が見えなからうと思ふが、大體この神は絶えず上天を睨んで、一片の雲騎だにも許さじと、見張つてゐる爲めの眼だから、天に向けて開いてゐるものだといはれる。

この神は、「三才圖會」によると魃魃の類で、人面獸神、身のたけ二三尺の、猿猴に似た恰好だが、これに雌雄あつて、男魃女魃と成つてゐる。その一本脚を以て松葉杖も用ひずに、とび歩くが、それでゐて走ること風の如く、すさまじく速い。腕はと云ふと、これもまた一本しか着いてない。脚にしる、腕にしる、左右いづれにも片寄せず、身體の真中に着いてゐて、甚だ邪魔相に見へる。

「抱朴子」には、魃を山精と同一視してゐる。その云ふ所は、山精はその狀小兒のやうで、脚は一本しかない。そして足は反踵といつて、踵が前方に向き、爪先きが後方に付いて反對になつてゐる。夜好んで人を犯し、不埒を働くが、それに早く氣着いて、こちらから其名を呼んで叱つすれば、犯すことが出来なくなる。その名を魃と云ふ、とある。

だが「永嘉記」には山精と魃とは別になつてゐて、山精は蟹などを常食にする山鬼だとある。魃神一たび現れるときは、千里忽ち赤土と化し、萬物すべて、生氣青色を失ひ、天が下すな

はち大旱焦土に變ずるといふ。この神またよくない事に、火遊びが好きで、火氣を弄し、人家に放火することもあると。それ故、火熱の祝融神と共に、古來大いに畏れられてゐる。

こゝ滿洲の田舎では、大旱の禍を爲す下手人は、猫に似た黄色の小獣鬼で、これが魃神の本體だと成つてゐる。此奴が出て、あたをする事だから、見つけ次第に捕まへるか、打殺して終はなければならぬ。だがこの獣鬼を捉へるに、普通の羅網や棒切れでは、忽ち焼焦けて了ふ。そこで熱火に堪へる陶物、それも農家の炊房に据ゑてある水缸が一番いい。それを手速く引冠せる。さすれば、じゆうと火の消へる音がして、一すんも動けなくなると云ふ。しかしまだ、これをとらへた話を聞かない。

太古堯の時、未だ曾てない大旱魃が続いた。天に二日なく國に二帝なし、といふが、この時の天には、十日竝び出て赫々と照り耀き、来る日もく、一叢の雲とて望まれなかつた。萬葉の金線は燦々として禾稔を焦き、生きとし生けるもの、皆生色を失つた。帝大いに心を憫まし、當時、最も射を善くする、羿といふ一武官を招いて、何事かを命じた。羿は、その頃、九嬰、大風、修蛇などの、蠻族兇民を討ち平げた勇者である。勅をかして

み齋戒した彼は、手だれの強弓を引絞ると、矢つぎ早やに忽ち十日を射た。射れば名射手のこと必ず的り、的れば必ず、一つ一つと落ちては消える。遂に九日を美事射落した。落ちないその一つは、本當の目で、落ちた九つは魃の小獣鬼であつた。

羿は後仙女西王母から不老不死の仙果を受けた。早くこゝろみて了へばよかつたものを、妻の嫦娥に喰べられて、口惜しがり、叱責すると、嫦娥は上天へのがれ去る、といふ戯曲がある。毎年仲秋節には必ず演ずる梨園の縁起ものになつてゐる。

こゝに又變つた魃の登場がある。

三皇の一である炎帝神農氏の後ちであるとされる、黄帝の時の一諸侯の蚩尤は、神農と同じ妻姓であつたし、神農は黄帝に滅ぼされてゐるから、心よからず、遂に叛いて亂を爲した。黄帝は帥を徵して、蚩尤と涿鹿の野に戦ひ、遂にこれを亡した。

此の時、黄帝は、應龍にその術を行はせ、蚩尤を攻撃せしめたが、蚩尤とてもさるもの、風伯、雨師に命じ、大風雨を起して對抗した。この風雨のため應龍はその勢ひを挫かれたので、黄帝今度は、風雨と反對の魃神を徵して、これに當らせ、遂にその法力によつて風雨をとめた。そして蚩尤を擒殺したのであるが、この時の魃神は女性で、而も天女になつてゐ

るから、一本足の山猿や、猫に似た怪獣でもなく、相当美しかつたに違ひない。

天 狗

支那の天狗は、日本の天狗とは聊かならず相違がある。「五雜俎」に、天狗止る所輒ち夜人家の小兒を食らふ故に婦女嬰兒多く之を忌む。とあり、「山海經」には、天門に赤犬あり、名づけて天狗と曰ふ。其光天に飛び、流れて星となる、其聲雷の如し。また「博聞錄」には、陰山に獸あり、その形狸の如く而して首白し、蛇を噉ふ、之を天狗と名づく云々。

是等で見ると、天狗は流星の如く光を發し、雷電の如き響きと火光とを有つて、天空を駛る妖獸といふ事に決着する。そしてその形體は、犬又は狸に酷似すると云ふから、さう大して大きいものではない。

これが清の「述異記」となると大分はつきりとしてくる。曰く、康熙壬子四月廿二日黎明、錢塘の西北郷に孫姓の者あり、門未だ開かず、隣人夙に起きて孫が屋脊の上に一物在るを見る。狗に似て而して人立す。頭銳り、喙上り半身赤色、腰以下青きこと鼈の如し。尾は帚の如く長さ數尺あり、驚いて孫を呼び之を告ぐ。甫て門を開く。その物上に騰りて雲際に急ち聲を發す。

霹靂の如し。委蛇屈曲西南に向つて去る。火光迸烈として箒の天を掃ふが如し。時を移して乃ち息む。数十里の内、皆其聲を聞く。亦其光を仰ぎ見る者あり。所謂天狗地に墜つる雷の如しと、云々。

何うも斯うなると單なる妖獸ではなくなつて、相當大なる働きを有つ魔物といふ事になる。そしてこれが「五雜俎」に曰ふ如く、小兒を取つて食ふのであるから恐ろしい。

俗間で言つてゐるのを聞くと、雷電に雷獸が潜み居るやうに、流星に一種の天狗が隨從してこれが地上へ落ちると、人界に仇をする。即ち幼い子供等を捉へて食ふのであると。であるから要するに天狗は天の狗で、日本の天狗のやうに、あらたかな神でも、佛でも、また大僧正でもなんでもない。

支那滿洲では、五歳以下の小兒の死は、すべて此の天界の狗が、夜中竊かに襲ひ來つて、その子の肉體を取つて食ふがためだと成つてゐる。だから子供達や、子供を持つ親にとつては、天狗ほど怖しい無惨なものはないのである。

日本では昔、うぶめ鳥といふ妖鳥が居て、幼兒を好んで食ひ、夜中妖聲を發して翔び歩きながら、子の着物の洗濯して干してゐるのを發見すると、その家に子供の居る事を知り、忍び込

んで食ふ。それ故に、子供の衣類に限り夜干しを禁じたと云ふ。

無邪氣可憐な、幼な兒の命を奪ふ天狗は、どうもこのうぶめ鳥に似た所があつて甚だ恐るべきものに成つてゐる。

支那天狗の畫に描かれてゐるのを見ると、黒或は赤色をした犬で、背に二枚の翼を有ち、身に火炎をまとうてゐる。黒雲に乗じて、天空を飛翔する姿は、決して惡魔のやうには見えないほど颯爽としてゐる。

それで幼兒の死ぬのは、この天狗の仕業だから、死體は戶外に捨て、天狗に與へる。魅込まれた子の屍であるから、天狗に與えて終はぬことには、あとの祟りが恐しい。若し然うせずに埋葬したりなんかすると、天狗はその死んだ子の兄弟に取憑いてその命を奪ふ。あとの兄弟の生命を完うするには、最初死んだ子を天狗の犠牲とするのである。天狗の他、幽鬼が取憑くといふ説もあるが、茲では暫く天狗説に従つておかう。

この俗信は、今日でも尙確信されてゐるから、姪婦があつて、分極間近かになると、先づ天狗の防禦に努めなければならぬ。

その方法は、張仙または張天師と稱ふ勇ましい道士を描いた畫像を、戸口に貼つて置くので



張天師畫像

ある。この張天師像は、黄色い袍を着た武人體の一個の丈夫で、弩弓を引絞り、天の一方に現れた天狗を、はつたと睨んでゐる。そのまはりには、子供等數名まつはつて、恐れをのゝいてゐるのである。そこから、ちよいちよい見受ける張天師像は、硝子繪が多い。硝子繪は、硝子の裏面へ描くもので、それを引繰返して眺めるのだが、張先生の持つ弓は、いつも右手にあつてあべこべだ。畫工が描く時には、確かに左手に持たせるのだが、反對にして見るから、右手に持つ事になる。こゝには却つて硝子繪職人の、構はなさがあつて面白い。

その畫像を掲げて置くと、天狗がやつて來ても、屋内へは一步も這入らず、生れた子は達者に成長するといふ。

この道士、張天師といふのは、張良八世の孫、張道陵といふ先生で、或日悟る所あつて、蜀の青城山へ奥深く入り、困苦精進して遂に成道を得た神仙である。が、しかし畫像には何れも仙人らしくなく、美髯豐頬、頗る好男子に出來てゐる。張天師が美丈夫であつたため、また茲に一條の話がある。

唐朝が瓦解し、その後宋が興るまでの五十餘年間、天下は麻の如く大いに亂れた。後梁、後晉、後漢、後周の五代が興亡し、覇を競うたが、それは江北の事。江南ではまた所謂十國が

起伏出沒、鬭争をことゝしてゐた。

その十國の内、後蜀の昶王が、身も魂も打ち込んで溺愛してゐた國色があつた。それは花蕊夫人と稱ばれた徐慧妃で、これこそは將に美姬中の美姬、四百餘州に響き渡つた尤物だつた。昶王はその頃、北漢と提携して、宋に對抗してゐたが、戦ひ利なく、將卒の首級一萬を委して宋の軍門に降つた。宋の太祖趙匡胤といふのが、これ又、古今に絶した名うての好き者で豫てから徐慧妃の艶色を耳にして惚れてゐた。實を言ふと、後蜀に軍を出したのも、花蕊夫人の類ひ稀れなる美貌と、その艶色にぞつこん打込み、それを得んの目的からの出兵だつた。それ故降参して來た昶王のことなど、そつち除けで、まづ徐慧花蕊夫人を鄭重にもてなし、己れが居城昶京につれ來つた。今の開封である。

花蕊は宋朝の後宮に、再び榮華の目を送るやうになつたが、昶王のことは胸中を去らない。本朝八重垣姫の如く、王の姿を畫像に描かせて、朝夕眺め侍づき、せめてもの慰めとしてゐた侍女が怪んで訊ねると、子供の出来る神様なりと、胡魔化した。處が或日太祖の眼に留つたからさあ納まらない。是れは一體何者ぢや、と聲荒らげて詰問した。事がいささか急だつたので花蕊も言葉に詰つたが、やゝあつて、につこと笑み、「あららいやだ、張天師ぢやないの」

施 大 人

關岳廟、娘々廟、龍王廟、觀音廟など道教に關係ある諸廟に附隨して、施大人なる神が祀られてゐる。その祠堂は小さなものが多く、従つて神像も高々二三尺のものだが、これがまた奇にして怪である。禿髮、隻眼、缺耳、缺鼻、偏體、鳩胸、跛足、癩瘡、脹滿、缺指、隻腕、その上至る所に汚穢な皮膚病あり、膿血地に滴つてゐる。全身五體満足のところとて無い癩人態の姿であつて、更にその着てゐる服が襤褸甚しいものだ。それが、曲つた杖に縋つて、氣息奄々たる状を示してゐる。一見爛壞腐敗、臭氣を放たんばかりの醜狀で、阿片鬼の如く、瘦せさらばうて佇立する。さじづめ疫病神と貧乏神を合せたやうなものだが、それでゐて却々諸民の信仰は厚いのである。

施大人は病氣の間屋で、何病でも持合さないものはない。それで大人に祈り、お願ひすれば如何な病も立所に治ることに成つて居る、それで神像の患部、即ち己れの病む部位と同じ場所を神像のそれに求め、眼が悪ければ眼、鼻の疾患ならばその鼻といつた風に、像の患部を撫で

て己れの忠部へその儘を推で廻す。新念しながら幾度かこれを繰返すわけで、我が賓頭盧尊者と似通ふものである。此祠にはお供へ物が一杯にあがつてゐる。患者が上げるその供物は、眼の悪い者なら紙製の眼鏡、耳なら同じく耳囊、手なら手袋、足なら靴、内科に疾病ある者は、紙または布を腎臓の形に造つて供へる。咽喉の悪い者は青大根を上げる事になつてゐるが、その理由はよく知らない。

施大人の祭日は特に何月何日と決つてゐないやうで、其處の本廟である關帝や、娘々や、天齊廟の祭日に同時行はれるものらしい。その當日には、今言つたやうなお供へ物が、所せまきまでに上げられ、また大人の像の全部へ引掛けられて、そのため肝腎な神像が拜めないやうになる。是等の供物は多く家で年寄達の手製になるものだが、都會だと札紙帳子といふ葬式の造り物を作る店で賣つてゐる。

全きところ一つもない施大人は、別に十不全シブツクサツツとも呼ばれてゐる。其の十不全とは、身體の不完全を意味する掉號と思つてゐたところ、それもあらうが、事實彼れは施不全シブツクサツツといふ同音のそれを有つて居た。而もその不全は、康熙帝から賜つた諱である。そして此の乞食非人の如き姿した彼は、驚いたことに清朝隆盛期に於ける、一顯官なのだつた。

かれは初め揚州府江都に知縣として擧げられた。明智にして清廉、訴へを聽いて裁斷流るゝ如く、條理整然として、いささかも私が無かつたから、原被共、その明斷に恐れ入つて一言の不平不満がなかつた。古への包文正も斯くやと思はれる人物だつたから、縣民の敬崇尊慕は絶大で、皆彼を徳とし尊敬した。この一事に依つて當時地方官にろくな者なく、贖贖不正、私腹を肥す貪官汚吏の多かつた事が窺へる。

後年順天府々尹に榮達し、次で通州倉場總督から、淮安漕督に累進した。それ故か、數ある施大人像の内に、奉天小東關の施公祠に祀つてある像は、位冠束帶、笏を構へて威風人を壓する如く造られてゐる。

然し此の人、その頭腦と反對に、風采の擧らなかつたのは、本當であつたらしい。殊に脚疾のためか、歩行に自由を缺いてゐた。この事は施大人の事を記した、あらゆるものに出てゐるから事實であつたらしい。

施大人は、清直剛正な氣質から、地方にあつては、惡漢野賊の剽滅に大いに盡した。彼を扱つた戯曲小説には、すべてその事があり、幾度か虎穴に出入して、大いに辛酸を嘗めたらしい。それ等によると、俠遊の助太刀、義賊の歸順等面白く書かれてゐる。固より大部分拵らへ

物だから、あまりあてにはならないが、とにかく神佛中異色あるものと言へよう。

爆 竹

爆竹は悪魔拂ひである。音響のみの連続花火で、一連一百發。最初の口火に點火すると、一つが鳴り終らぬ内に、次ぎ、次ぎ、と鳴り出すから、音が重なり、一發の音響も、二發三發分の大きさと成つて響く。頗る景氣が好い。正月行事には勿論、紅事の喜びに、白事の悲しみにまた長の旅から戻つた時、軍旅凱旋は固より、大官出張先の客棧に着けば、また之れを行ふ。病家療癒の氣を拂ふにあつて又然りである。

爆竹の發明者は諸葛亮と言はれるが、これはあてにならぬ。昔、或る山中に樵夫あり、山に入れば山猿憑き、里に下れば妖狐が移つた。一日思案にあまり、焚火に隔つてゐると、けたましい音をあげて、火中の青竹がはぜた。この一發の響きに依り、妖狐も山猿も退き逃れて、急に低迷の妖氣は消えた。四邊は輝しき朝の光に満ち、樵夫は始めて茲に爽快明朗な氣を取戻すを得た。これが爆竹の起源だとも言ふ。

爆竹は最先端の火口に、ちよいと點火しただけで、一百發が連發し、その間途中でとゞめる

ことが出来ない。昔辨髪のおつた頃、悪戯者が、人混みの裡で、他人の辨髪にそつと之れを結びつけ、煙草で點火して逃去る。と、俄然けたましまし響きをあげて鳴りはじめる。別に火傷する程のものではないのだが、突然ゆゑに仰天し、慌てふためいて、これを解うとするがいけない。見物は人垣を作つて囁し、手を拍つて興じる者もある。常人こそいゝ恥さらし、滑稽な道化者視されて、面子まる潰れだ。この悪戯が人氣を呼び、至る所で繰返される。悪戯としてはまことに質がよろしくない、といふので、官邊に於ても取締りに乗出した。

ところが、その取締りの眼をかすめて行る所に、更に興味を感じたと見え、それ以來一層この事が流行するやうになつた。官は瞞氣となつて、その現行犯を捉へるべく小吏に命じたが、仲々巧妙だつたと見え、一人も擧がらなかつた。

同治三年正月尙書左丞の伴某が、北京前門外に於て此の難に會ひ、觀衆の眞中で大恥を受けた。さあ斯う成つては只事で済まされなくなつた。翌日から多勢の密偵を放つて、そのみの檢擧に宛てた、といふから官憲も今度は眞剣になつたのであらう。數日後、二人の不良少年をその現行犯として捉まへた。そしてその所刑は驚くべし、廣安門に於て斬首であつた。

自分は本書の巻末に、悪魔拂ひの爆竹をあげ、書中に叙した怪力亂神の鬼味を打拂ふ心算であつたところ、筆はまたそれによつて「亂」の一事を語ることに終つた。(了)

あと書き

此の書の著者の長谷川さんが、斯んなものを書いたのが溜つて居るがと、突然書を寄せられたのは昨年の秋であつた。その斯んなものと云ふのは此書中に収めた「萬人坎」の一部で、それは何か醫學雜誌の抜刷のやうなものであつた。私は一讀して後、早速その残りの原稿を拜見させて頂き度いと申送つた。すると、折返し少し待つて欲しいと云つて來られた。

年が改まつて二月中旬、大きい小包が着いた、それは「怪力亂神を語る」と云ふ題で、滿蒙の見聞録と、支那の古書（主として所謂鬼書）から鬼話や怪奇な故事を輯めたもので、それを怪、力、亂、神の四項目に別けて收めてあつた。

丁度、邑樂氏の譯出された袁子才の「子不語」の草稿を読んだところであつたので、此の書は、著者の直接見聞に關するところを主として再編輯する事の諒承を得、更に二三項の新稿を加へて頂き、此のやうな形で世に贈ることとなつた。私は此の書が、大陸に對する認識へのよき資料を提供するものであることを信じて居るので、此の出版により今迄と異つた分野で職域

奉公の機会を興へられた事を著者に對して心から感謝して居る。

たゞ一つ著者併びに讀者に御詫びしておき度い事は、萬人坎の中の、處刑を敘したところの一部は、その描寫があまりに巧緻で生き／＼として居るために、慘酷にすぎるのを恐れて割愛削除のやむを得なかつた事である。

なほこのやうな事を記しては如何かと思ふが、著者長谷川さんは「私は小學校を出た丈けです。職業は蠟燭型を作る事です」と云はれた。その長谷川さんが木下奎太郎先生に愛せられて満洲醫大に勤められるやうになつた事は承つたが、如何してそんなにひろく各地方を旅行されたか、その事情についてはこゝに記すことが許されない。兎も角も、長谷川さんはなほ多くの材料を持ち、書中に見られるやうな筆の力を持つて居られる。必ず續篇を書いて更に世を益せられる事であらう。長谷川さんを紹介の意味でこれを記しておく。

昭和十六年七月

長崎次郎

昭和十六年七月廿八日印刷
昭和十六年七月卅一日發行

講義九話

定價 壹圓八錢
外地貳圓

版權
所有

著者 長谷川 兼太郎
發行者 長崎 次郎
印刷者 東京市牛込區改代町二四
田 中 末吉

理想社印刷

發行所

東京市豊島區西巢鴨
三丁目七〇三

長崎書店

振替東京七一八八六番

配給元

東京市神田區
淡路町二ノ九

日本出版配給株式會社

(會社登記第一一〇〇二)

袁子才著 近代支那子不語

B6判美装 三五〇頁
定價一・八〇(千一〇)

支那の民俗・慣習・信仰等を知るに最も手近で最も興味深い書を探れば、この「子不語」に如くはない。此の書はもと正續三十四卷、千餘篇を容るる近代支那傳説民話の一大寶庫で、本書はその百六十篇を選んで、時文の原形を巧みに保存しつつ和譯せるものである。大陸に關心を持つ人々の必讀書。

長谷川著 滿蒙鬼話

B6判美装 三二〇頁
定價一・八〇(千一〇)

滿蒙在住四半世紀、足跡遼瀋にあまねき著者が、その見聞するところを活寫したものがこの書である。天ひろく水長き大陸の妖氣に満ちた風物は、今なほ生きた「子不語」の世界である。「子不語」と併せ讀んで、大陸の風物とともに民俗・慣習・信仰を知らうとする人に興味と實益を兼ね供するの書である。

